魔法先生ネギま！精霊転生

アルルン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法先生ネギま！精霊転生

【Ｎコード】
Ｎ１５３１Ｓ

【作者名】
アルルン

【あらすじ】
ネギま二次作品です。
独自解釈を含むのでご注意ください。
ネギまの世界観ですが、古墳時代から始まります。
ネギ君がでてくるまで時間かかるかもです。
まほら魔改造＆魔法世界創造編、次回スタート。
主人公が創造主になる？

外伝始めました。
http://ncode.syosetu.com/n6825s/

前口上（前書き）

二次作品は初めてです。
訂正、作品の改善点は大歓迎。

前口上

はあ、はあ…。道に迷ってしもうた。
一人の老人が溜め息をついた。ここは黄泉の峠、三途の川の少し手前にあたる。老人はまだ黄泉醜女に出会えず、白装束に身を包んでいる。老人が途方に暮れていると、何故だか目の前が白い霧に包まれ、霧の向こうに地蔵尊らしき輪郭が見える。
地蔵尊は語る。
「お主は八重に渡り、輪廻を経験して善行を積んだ。故に、来世は神霊となって、人々を導いてほしい。」
老人は反射的に是と答えた。自分の名前を忘れてしまった今、特に思い残すことはない。
ただ、自分はこれからどこに向かうのか、前世の記憶をもっていけるのか問うた。
地蔵尊は、また語る。
「お主は現世とは第五次元軸において少しずれた世界に行ってもらう。そして一人でも多くの人生を満足させていってほしい。もちろん人の形をとることができる。だが、これだけは気をつけてくれ。神霊は来世の精霊の上位なので、下手をすればその世界を自らの手で破壊してしまう。力の扱いには十分慎重にしてくれ。あと、前世の記憶は引き継ぎ可能だ。ただし、今回は黄泉の国を例外的に入らずに転生する都合でお主の思い出を封じねばならん。これは、こちらの会議で決定しているので異論は受け付けられん。それでもよいか？」
頷いた老人は空間に溶け、次の世界、魔法に満ち溢れた世界へと旅立っていった。

第一話（前書き）

訂正・改善点指摘大歓迎。

第一話

時がどれくらい経ったのか、さっぱりわからない。だが、気づいたら信じられない程巨大な樹木の枝の上に座っていた。　そして、自分の身についてすぐに理解した。

私の名はガンダルフ。精霊を配下とする神霊であり、精霊魔法はノーリスク、ノーコストで扱える。さらに、固有能力が魔の創造である。つまり、魔に関するあらゆる物を創造できる。私の容姿は、私自身杖を持った爺と思っていたが、実のところ変幻自在であった。前世の微かな記憶を辿っても、老体は結構肉体的に苦労した覚えがあるので二十代の容姿に設定する。　黒髪が腰に届くほど長く、体格は中性的で容姿端麗であった。

しかし、実に困った。なんせ周りを見渡したところ、どうも現在は古墳時代のようだ。過去の歴史を知っているといっても、当時の言葉、果ては文化の詳細までは知らない。これは難儀なもんだ、と少し落ち込んだ。あと、自分の名前がこの日本に似つかわしくないと感じ、当分は姓を葦原、男のときは勇太郎、女のときはユウメ、とごまかしておこうと決意した。

ひとまず住居が必要なので、この神木の幹の下にちょこんと空いている孔に入った。浮遊魔法で移動し、穴の中の空間を魔法で拡大し、祭壇を設けた。この神木蟠桃（ばんとう）は、三千年に一度不老不死の桃をつける桃の木であり、イザナギノミコトが黄泉の妖怪の軍勢を桃の実でうろたえさせる程、魔除けの力を持っている。これを活かして、極

めて強力な破邪結界を張り、霊的に安定した場を確立した。神霊は人をかたどるのみで、飲食は必要ない。よって、この地下空間は聖霊にとって非常に快適な空間となった。少し一息ついていると、頭上から声をかけられる。

「我が名はオホカミヅミノミコト。御仁、いかがなされた。」

なんと神が実体化しているではないか。自分の事を脇において驚いてしまった。

「私の名前はガンダルフと申します。宛てのない一介の神霊であり、安全な居を構えようと思い、穴を掘り、蟠桃を弄りました。不覚にも無断に御神木を利用し、申し訳ありません。」

深々と頭を下げたところ、オホカミヅミノミコトはカラカラと笑って、

「よいよい。面を挙げよ。ここ真秀(まほら)らでは皆が我を怖れ、敬うのみであり、退屈であった。我、ひいては蟠桃の真の価値をわかっておるのはお主だけよ。好きに使うがよい。」

随分と好意的であった。その後、蟠桃の頂上で酒盛りをし、

「ほお、お主は精霊とは違って、人の形になれるのか。」
「ええ、男でも女でも、子どもから老人までなれますよ。」

酒が回って酔いも回る。仙酒はニ柱を酔いつぶそうとする。

「だが、この目で見んと信じにくい。どうだ、お主。試しに十の童女になってみよ。」

ボンっと男が煙に包まれた後、煙に映った小さな影が輪郭をおびてきた。烏羽色の髪がさらっと艶やかに腰をなで、くりっとした目の内には星が宿っている。あどけなさが残る白い真珠の容貌に藍色の着物を着た大和撫子は、月を体現したかのように美しかった。少女は酒で顔が余計に赤くなっており、うつむいてボソボソと言葉を紡いだ。

「自分で言うのもなんですが、結構気恥ずかしいです。そのぉ、じっと見られると尚更に。」

不覚にも凝視してしまった桃神はそっぽを向いて一言、

「余にそのような趣味は断じてない。あ、余りに唐突な変化に驚き固まってしまっただけだ。」
「誰に言ってるんですか。」

神霊も桃神も、揃って酔いを吹っ飛ばしてしまった。

しばらく一考した後、人々を導く使命に沿うよう、世界中を行脚することにした。この身は個に縛られ、全ての人を救い導くことは叶わないが、一人でも多く、満足に人生を全うできるよう努めていきたい。そう願ったガンダルフは青年に変化し、オホカミヅミノミコトと別れを告げた。

古墳時代の服装は胴貫着であり、今の時代からすると遥か未来の服装なので非常に浮いて見えたに違いない。背が高く、黒髪を腰まで伸ばし、中性的な器量良しであれば尚更だ。私は道中出会う人々に右手をかざして清め祓い、病を完治させたのだが、感謝というよりも恐怖にかられてしまうのが殆どだ。

しかし、そこは挫ける訳にはいかない。仕方があるまい。その反応に嫌気がさしたことなどお首にも出さず、村で困った事を聞き出す。

大方どの村も似たようなものであった。食料不足、水不足、伝染病、洪水、日照り、と挙げればきりがないが、ひとつずつ堅実に解決していった。手っ取り早い解決の道具となる魔法はどうしても必要な時以外は使わず、人々に前世から得た知識と技術を与えた。これは、私が去った後も自力で解決できるように、という配慮からだった。魔法はそう習得できないが、知識は継承しやすい。村の人々は、火に水に風、果ては雷を操り、膨大な生きるための知恵を蓄え、温厚な性格である青年を歓迎した。治水に成功した時など大宴会で

あった。

私は、ふらりと村に現れては善行を少し施し、そこの村人と仲良くなった。その代わり、その村の風習や物語を教えてもらった。そして颯爽と村を去り、また放浪する。西へ東へ北へ南へ。

私はいつしか『藍色の賢者』『放浪の救い手』などと、むずかゆい名前で呼ばれ始めた。

だが、決して良いことばかりではなかった。
凶作の冬にある村を訪れた時には、その村の者はすでに全滅していたこともあったし、伝染病や津波などで周囲の地域ごと壊滅したこともある。そんな時は村に行っても、「おめーは厄病神だ。」と石をなげつけられた。

でも、そんな人間が大好きだった。

もう一度生まれ変わり、前世の名前すら忘れ、ひたすら人と一緒に居ることが好きな私は、子どもがはにかんで、大人が微笑む姿を忘れることができなかった。だから、一度は嫌われても笑顔を絶やさず、率先して復興に貢献した。

重税を毟り取って私腹を肥やした役人が、私に『救い手』として餓死寸前の村人を助けるよう脅してきたこともある。

私は、そんな人間が大嫌いだった。

どうしようもなくお金と食べ物がなくて、身売りに出された者もいた。
どうしようもなくお腹がすいて稗や粟を盗んで、捕まって縛り首になった者もいた。
なのに、何故こうも物質的に満足のいく生活を営む者が、薄汚い精神を持ち合わせているのか。だが、理由はどうあれ無闇に人を殺めたくなかった甘い私は、そいつの夢で悪夢に添えて警告する程度しかしなかった。まだ神を真剣に信じていた時代、たいていの者は素直に信じ、それでも圧政を強いる者は天雷の消し炭になってもらった。

さて、随分シリアスになってしまったな。人間の生を終え、神霊の生を歩み始めてからというもの、私は実に色々な遊びを楽しんだ。
ジェンガやベーゴマ、ヨーヨーやすごろく（文字なし）、花札など、未来の遊びは老若男女問わずに楽しめた。

賭け事は身を滅ぼす原因になるから教えなかったが。

人から教わるものも多い。

ある村でユウメ（１０）に化けて、子どもたちと童心に返って遊び

に加わったところ、鬼ごっこをすることに決まった。

「よし、ユウメ。目隠し鬼の鬼をやれ。」

えっ？私？

「そんじゃ、十数えろよ。」

皆、散り散りになって逃げていく。本来、目隠し鬼っていうのは鬼のハンディを考慮して、逃げる人は手を打ち鳴らして「鬼さんこちら。手の鳴るほうへ。」と歌い、鬼が『夜』と応えれば、逃げる人は静止しなければならない。だが、今回皆が初心者と思っているユウメにルールの説明なしで始めたのだ。

つまり、鬼に夜は来ない。

思わず口角が吊り上る。今、私はわかりました。力の使い所は、こういう事だったのですね。精霊魔法ではないので感覚強化・身体強化魔法を創造、発動。じっと耳を澄ます。

サワサワ……………………ザッザッザッ……………

………………………………

……………………………………………………

…………………………………………………

……………………………………………………

……アイツハ……………………………………

・・・カサッ・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・マダダ・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ミツカラナイカナ・・

・・・

ゴソ・・・ウゴケッコナイダロ・・・・・・・・・・

・・・・・ソレモソッカ・・

・・・・・・・ソウダヨネ・・・

なるほど。木の上に二人、家の間に一人、土手の向こう側に三人。これで全員か。捕まる気はさらさらない、というより舐めてる？

笑顔を貼り付けたままコメカミに青筋が浮きだった私は蹂躙を始めた。今思うと大人げなかったかもしれない。だが後悔はしていない。

力の差をまざまざと見せつけ、子ども達を驚愕させて縁側で私はホクホクしていた。すると後ろから声をかけられる。振り向くと、一日宿泊を許してくれたお婆さまだった。

「おめーさんはだれだ？」
「あぅ、私はユウメです。今朝たずねてきた旅人です。」
「ぇえ？ん～と、あの男かぃ。嘘いうでねぇ。」
『不味いな。この人、私が化けるとこ見てないし。もう夕方だから化けたら妖怪扱いされそうだし。』

お婆さま、顔が近いです。怖いです。

どう言い訳しようか悩んでいると、そこに助け舟が現れる。

「婆さん、その方は勇太郎様だ。陰陽の術を極めていらっしゃって、ご自身の命を守るために姿を変える術も身に着けているらしい。」

「まあ、なんと。先ほどは無礼を申し上げました。どうかお赦しを。」

えらく態度が変わったな、このお婆さま。そしてお爺さま、ＧＪ。あと、そんな噂聞いてないぞ。もう神霊名乗るの辞めてるけど、いつから陰陽師になったんだろ。

「では改めまして。葦原ユウメです。今日は泊めてくださってありがとうございます。」

はらりと黒髪が揺れる。端整な顔をした美少女に、二人は心をほだされ厚くもてなした。

夜も更け、宿の主人も寝静まった頃、私はひとり縁側に座る。私はだれもいないはずの玄関を見つめ、

「そこにいるのは誰？」

黒い影が躍り出た。

第一話（後書き）

あっさりすぎたんで訂正。

第二話・挿話一～浅間山の大噴火前編（前書き）

訂正・改善点の指摘は大歓迎。

会話部分がいまだ少ないのが残念。

第二話・挿話一～浅間山の大噴火前編

ここで時間が少し遡る。時は飛鳥時代、私は群馬の浅間山のふもとで山賊に襲われた。数十名程が青年を円形に囲み、小剣や弓矢を向ける。

何度も遭う襲撃にため息をつく。気で強化していない剣でいくら斬られようが、常時展開する多重障壁でかすり傷も負わないからだ。

今度はどう逃げようか、それとも適当に火で尻をあぶって追い払おうか考えていると、山賊の頭領らしき男がしゃべりかけてくる。

「てめえ、いい形(なり)してンじゃねーか。その服と命、どちらを持って逃げてーか？」

加減を間違えて殺したくはない。ならば、浮遊魔法で空に逃げればいいと考え、

「生憎どちらも持って押し通らせてもらおう。」

と即座に浮遊魔法を発動。弓を射た者は余程呪い（まじない）に長けていたのだろうか、左肩に矢を射られる。痛みは不思議となかったのだが、脳は警鐘をならし、そのまま道から遠く離れ、湖畔で返しのついた矢を抜く。ナイフでえぐられたような痛みに襲われ、治癒魔法で、体外の傷を治した。治療した後も患部を中心に感覚がなくなり、逆の腕で肩を触るとボロボロと崩れ始めた。

矢を観察すると、本体にエンジュの木を使い、鏃にはナンテンの毒を塗っていた。

エンジュは『延寿』と掛けられ、魔を祓い安産長寿に縁起がある落葉樹で、ねばりのある材質から用途は幅広い。一方、ナンテンは『

難を転じる』縁起の良い樹木で、鬼門や裏鬼門に植えられる。ナンテンの実をすりつぶした毒は、知覚や運動神経の麻痺を引き起こす。

私の対魔障壁は縁起の良い破魔矢には通用せず、さらに対物障壁はナンテンによって難、つまり障壁が矢に与える力の向きを反転されてしまった。結果、障壁を貫通した矢は私の肉体を表面だけでなく、エーテル体まで傷つけた。肉体の”つなぎ”の役目を担うエーテル体が破壊されてしまった部分は、いくら肉体を修復しても乾燥した挽肉のようにバラバラになってしまう。

悩んだ末、出立の時に桃神から贈られた貴重な仙酒の一酌を飲む。

『これは、すぐに死に至る前に飲むんだ。でないと、肉体や精神が再生するどころか黄泉の世界に馴染んでしまって現世にいられなくなるからね。使いどころに気をつけるんだよ。』

酒は全身を駆け巡り、沸騰する。全身は煮えたぎりエーテル体の損傷部位が修復される。あまりの激痛に悲鳴を上げて溜まりに溜まった魔力が暴走する。でたらめに発動した魔法は、嵐を呼び雷が鳴り湖は凍って蒸発し、霧が蒼い鬼火となって辺り一帯の森を焼く。

この大変動は浅間山で眠る大鬼をゆり起こしてしまった。機嫌が悪くなった鬼は地を踏み鳴らし金棒を山に打ち付けて咆える。浅間山は火を吹き、流れ出る溶岩と吹き出る大量の灰が麓を地獄に変えた。

間一髪で空中に逃れた私は眼下の惨状に思わずうめく。

一刻も早く、あの山の妖気を鎮めねば。

痛む体を押して私は山頂の火口を目指した。

第二話・挿話一～浅間山の大噴火前編（後書き）

６８５年の浅間山の噴火をエピソードにしようと思います。
この時代、浅間山周辺にどれくらい村があったんでしょうね。
ともあれ、次回は大鬼（作者の趣味で女性）とガンちゃんがバトルします。荒れ狂う火山と闘って、果たして勝てるでしょうか。

神霊は精霊に指示をだして魔法を使っていますが、ネギ君が使う西洋魔法のような詠唱はしません。また、魔力を餌にして指示をする必要もないので、神霊は魔力を消費しません。その代わり、神霊の魔力をわざわざ精霊に喰わせると、攻撃魔法はとんでもない威力を出します。

飛鳥時代には既に陰陽五行思想が伝来していることにしておきます。

第三話・挿話一～浅間山の大噴火中編（前書き）

一話修正。一話後半は奈良時代あたり。

第三話・挿話一～浅間山の大噴火中編

私はたちこめる硫黄の毒、うねる溶岩、とぐろを巻く黒煙をかいくぐり、火口にたどり着く。地球の活動の根源、自分と比べるのも馬鹿らしくなるほどの莫大な熱量をもった業火の濁流のなか、ひとりの女が佇んでいた。

鮮やかな紅が服の上で燃え、胸元を魅せつけるように大きく開いている。袖はあえて肘までに切り、腰の上で腰紐を結んでおり、脛の部分に大きく花の刺繍がしてある。着物スリーブドレスとでも言おうか、”現代”風の服装を踏襲しながら『現在』に通じるファッションに目を見張るものがあった。そんな服を着こなす女は、もう女性の美として完成していた。ケチのつけようもない美人（飛鳥美人ではない）だったのだ。彼女が人ではない証は、髪に隠れた二本の角だけである。

ただ、残念なことに妖艶な顔は、不機嫌です、と書いている。肩にかかった黒髪をばさりと払い、こちらをキッと見据える。

「あたいを起こしたのは、あんたかい？」
「ええ、そうです。」
「ん～、人間じゃないね～。人間の匂いがしない。あんたは誰？」
「そうですね。とりあえず葦原勇太郎と名乗っておきましょうか。一応神霊やってます？」
「とりあえず、て何だよそれ。しかも自分の身分に疑問ってあんた頼りないね～。まあいいや。あたいはツツジだ。ここ、浅間山に棲

む鬼だ。」
「そうですか。それで単刀直入に噴火止めてくれません？すごく迷惑です。」
「自分で嗾(けしか)けて置いてそれはないだろ。今あたいは、あんたを炭火であぶるか、油を搾り取るか、釜で茹でるか、それとも蒸すか迷ってるんだ。」
「生憎、私は食えない人間だと思いますよ。あと、神様食べるとバチが当たりますよ。」
「・・・それじゃあ、どうしろってんだい。」
「私のいくつかの質問に正しく答えられたら、煮ても焼いても結構ですよ。どうです。乗りますか？」

ツツジはしばらく考えている。こちらの目を覗き込んで、何か裏がないか確かめているようだ。鬼にしては用心深い、と思われる。私も反応に困ったので、ウザやかに微笑む。

「いいだろう。乗った！ただし、質問は二問まで。」

随分威勢のいい返事だが、これで彼女は詰んだな。私は思わずほくそ笑む。

「では、『はい』か『いいえ』で答えてくださいね。一つ目。」

あなたは嘘つきですか。

「いいや、あたいは正直者さ。」

ここまでは正直者だろうが、嘘つきだろうがどっちでもいい。要は彼女を『正直者』にすればいい。

「そうですか、正直者なんですね。では、ふたつめ。」

この質問に、あなたは『いいえ』と答えますか。

「え、えっと〜。はい？いや、おっかしいな。いいえ？・・・でもな〜。」

ツツジが正直者ならば、『はい』とも『いいえ』とも答えられないはずだ。『はい』と答えたら『いいえ』と答えてないから嘘つきになるし、『いいえ』と答えたら『いいえ』と答えているから嘘つきになる。

ツツジが嘘つきならば、『はい』でも『いいえ』でも良いけれど、「ツツジは『正直者』。」とレッテルを貼ったので、この発想は出てこない。
一問目はハッタリをかまして、二問目で叩く。それが青年の作戦だった。

すでにツツジの顔は赤カブみたいな色に染まり、耳から煙が出ている。さすが鬼、リアクションが一段とおもしろい、と笑いをこらえ切れず、クックックッと忍び笑いをした。してしまった。

ブチっと大事な何かが切れる幻聴の後、浅間山はまた大噴火を起こした。

私はこれまでに幾度となく妖怪を退治してきた。出会う妖怪はザコばっかで、強めの魔法を当てるだけで十分勝てた。妖怪は私の障壁を全く敗れないというワンサイド・ゲーム。それが妖怪に対して良くも悪くも余裕をもてるようになった。だが、今回はそれが裏目にでたようだ。これは保険の出番かもしれない。

辺り一面が炎の渦でうずまいている地獄絵図の中、ツツジは静かに語りかけた。

「今のあたいの気持ちがわかるかい？」

「鬼の考えていることなんてわかりっこないですね。」

軽口を叩くが内心ヒヤヒヤだ。闘う前から懐の保険を気にしてしまう。

それ位この鬼から殺気がビシバシ伝わってくる。鬼が笑う。

「それじゃあ、教えてやる。」

時間は急速に遅くなったと私は感じた。

ついには、鬼も溶岩も煙も、全てが彫刻のように固まった。

世界がモノクロームに映り、私の視界は昇華する。

可能性のある未来が、今、目の前にある。

それぞれの世界で、私の首は吹き飛び、腕がもげ、足がひしゃげ、最も高い確率で全身が弾けていた。

『分霊』の概念を応用した無限の並列演算の結果、私は９８．４７３１パーセントの確率で肉体が死ぬ。

残りの１．５２６９パーセントの世界で、私が初撃を完璧に受け流す確率は３２．１４５９パーセント、それらの世界でカウンターに成功する確率は２４．３６６７パーセント、それらの世界で・・・。

人外同士の刹那の戦いが始まる。

葦原は大きく後退しながら感覚・身体強化魔法を発動（ａｆｔｅｒ０．３２秒）。

直後、羅刹女は空に浮かぶ葦原に、神速で突っ込んでくる（ｆｏｒ０．２３秒）。

突き出した拳の一撃は、浅間山の質量・熱量を帯びた一撃であり、誰も受け止めたものはいない（ａｆｔｅｒ０．６７秒）。

すでに百万回以上は見ている右ストレートを、葦原は自身の胴体の軸をそらすことでかわす（ａｆｔｅｒ０．７６秒）。

首をひっこめて鬼の右回し蹴りをかいくぐり、そのまま体を捻り、右手を鬼の背中にかざす（ａｆｔｅｒ１．００秒）。

鬼は、自分の攻撃をかわされて驚いている。振り向く間もなく、右手から閃光が走る。

ゴゥン、と鈍い音と共に、ツツジは地面の溶岩に吹き飛ばされた。

今回使った保険は和鋏型魔道具『剪定』。私の固有能力で、製作過程を無視して作ったものだ。

魔道具の良し悪しは、？消費魔力？効果？耐久性、とおおまかな判断材料がある。

費用対効果を突き詰めれば、リーズナブルな物ほど魅力的である。

それは魔道具に限らない。

だが、この『剪定』に注ぎ込んだ効果は、単純かつ絶大だ。

それは、未来の剪定。

『今』から無数と伸びる、白い『未来』の枝を選び取って切り取り、自分の望む未来を選定する力。

不可能を可能とする力ではなく、どんなに小さな可能性でもその現象を起こしうるならば、その未来を現実にする力。

もちろん、『剪定』を用いるとき、時間は擬似的に止まったように感じるが、現実時間では起こしにくい未来を選定しようとするほど、思考時間が長くなる。

デメリットは二点ある。

魔力を馬鹿食いする点、十分に使いこなすために使用者は最低でもレインマン並の演算能力が必要である点である。

前者は言わずもがな、後者は魔力の消費時間を抑えるための技術である。消費魔力を抑える技術は開発できなかったので、演算能力の底上げに重点をおいた。

自然と神霊の性質、『分霊』に注目する。分霊は本来、祭神の霊を分けて他の神社にまつった神霊をさすが、そこを応用して、演算のみ行う簡易型分霊を『剪定』に注ぎ込んだ。

分霊に個という概念はない。一でもあり十でもあり無限でもある。

よって、消費時間は理想の魔道具を作ることができた。つまり、一瞬で演算が終わる。

試験運用で、限界まで影響を与えられた未来は三十分後までで、その直後『剪定』が耐え切れなくて自壊した。ただし、魔力を使うほど使用者の魔力が枯渇する未来に搾られていくので、魔法を使う戦闘では実質十分が限界予測時間だ。

ツツジが吹き飛んでマグマのプールに盛大に沈んでから五秒が経過している。なるべく切り札を温存するためにも無駄な使用を控えていた。

地獄のほの暗い底から、瘴気ただよう幽鬼がゆっくり現れる。

自分の影の中から黒金の金棒を取り出して、無言で振りぬく。

ブゥン。ゴッカーン！！

溶岩、火山弾、水蒸気に超音速で振るわれた金棒から発生する衝撃波が私を一斉に襲った。

先の見える戦いは、もう少し続きそうである。

第三話・挿話一～浅間山の大噴火中編（後書き）

バトルシーン、難しいな～。
主人公は人間に優しいけど、妖怪には基本容赦しない性格です。

渓流のクルペッコさんはいつもジンオウガ呼んでくれるのですが、あれでしょうか。ジンオウガっておとめ座なんでしょうか。ゲーム（戦場）のＢＧＭ（空気）を変えてきて、「今日の私は阿修羅すら凌駕する。」みたいに情熱的につっこんでくるんですよね。少しセツナに同情しました。

第四話・挿話一～浅間山の大噴火後編（前書き）

Ｒｉｎ' の曲はいいものが多いですね。
ネギま本編の妖怪が雑な扱いに見えるので、色つけてみました。

第四話・挿話一～浅間山の大噴火後編

ツツジは金棒で山の活動を制御し、近接主体で攻撃する。

葦原は距離をとりながら魔力をこめて、秒間千以上の大魔法を行使する。

たった二人の攻防が災害級の戦闘と化していた。

両者とも人間を遥かに凌駕する五感と直感で遠距離攻撃を避ける。

千を超える光の流星が山を砕き、天より降る火と稲妻の雨は大地を蒸散させた。

小妖怪ならかすっただけで消滅する魔法の弾幕の中を、ツツジは舞うように回避して葦原に近づく。

それは芸術であった。

壁に見える魔法を、避けて、よけて、回って、金棒で打ち返して、反動でまたよけて、大量の火山弾で押し返す。

一見、接近を許さない葦原の方が優勢に見えるが、実際は葦原の方が押されていた。

圧倒的な物量でおしつぶそうとしているのに、鬼は全く被弾せずに反撃してくる。

衝撃波は目に見えないため、弾かれた魔法から軌道を予測するしかない。

火山弾や炎の渦も瘴気が付加されていて、触れれば二度と健康な体に戻れないレベルの物ばかりだ。

威力や属性、速度と方向をこまめに変化させることで、緩急鋭い攻撃をし、決してツツジに慣れさせないようにする事しかできなかった。

お互い決定打を出せないまま、二時間が経過。火口の内壁を背にし、前にはツツジが浮かんでいる。　回避と反撃のために使用した『剪定』はもって、あと３０秒ほど。つまり、それほどツツジは強かった。だからこそ疑問に思う。

「戦ってみて感じたのですが、どうして騙し討ちとか虚を突くような攻撃をしないのですか。その技量を見れば何度となくできたはずですよ。」

「それはあんたと同じ理由だからさ。」

「…どういうことでしょうか。」

「人間になるのが怖いからさ。」

「あんたもあたいも、長い時を生きて、人はいろんなお面を持って

いると知っているだろ。騙し討ちなんかは人間がすることさ。あたいにも矜持ってもんがあんのさ。―」

「―あたいはね。本から鬼じゃあなかったのさ。ただの弱々しい小娘が父親が罪を犯したことで村から追んだされたのさ。―」

「―気づいたら山の中をさまよっててよ。そん時は、大好きだった親も、大嫌いな村人も、今までの愛憎関係なく全部が憎かった。―」

「―あたいは、食べもせず眠りもせず、ずっと山道を歩き回ってね。出会った人間にいつも尋ねたんだ。一番悪かったのは誰なんだ？ってね。相手は答えようがなかったよ。でも答えなかった奴は全員くびり殺した。この抑えきれない気持ちをどこにやればいいのかわからなかったあたいは、相手の答えに納得できなかったからみんな殺した。―」

「―いつからか、あたいは山に住む鬼と怖れられていた。鬼と自覚すると、あたいを突き飛ばした村に復讐しようと、その村に行った。だが、その村はもうなかったよ。疫病でみんな死んじまったのさ。あたいはどうすりゃいいんだい、誰に恨みをぶつければいい、と悩んでさ。結局答えはでなかった。だから、浅間山に君臨する恐怖の象徴になるしかなかった。―」

「あんたはあたしをどうすんだい。あんたの目をみりゃわかる。あんたは人を恐れている。孤独を恐れていて、それでも人を遠ざけている。そんなあんたが、あたいを止められるのかい？これからも、あたいみたいな奴を救えるのかい？」

言葉もでなかった。

よもや、そんな事を考えたこともなかった。

不幸を背負って、もう手遅れとなってしまった彼女に、どう答えを返そうか。

彼女は私の答えを待っている。

私は初めて、妖怪と人の枠を超えて、相手を見つめているかもしれない。

「私も、あなたも、人から忘れ去られることを恐れる身です。だから、あなたは畏怖を選び、私は感謝を選んだ。違いはそれだけです。本当はこの地に降り立ってすぐに気づくべきでした。」

人の気持ち、生活、境遇、時代、何もかもを下に見て、『救ってやる』という傲慢。

神霊だから、使命だから、どうだというのか。

それが免罪符となり得るはずがない。

「あなたを妖怪だからと蔑み、鬼と成り果てた経緯も知らず、あなたを殺そうとしました。ごめんなさい。」

葦原はこの世界で初めて頭を下げた。

目の前の鬼の謝罪だけではない。
碌に心をこめずに救い、感謝されることを当然と受け止めていた自分への贖罪。
神霊が人の生死を弄んでいたことを自覚しなかった罰。
それは、自分の過ちを悔い、心を切り替える上で必要な行為だった。
鬼は口を開く。

「自分を殺そうとした奴を、謝って許すと思ってんのかい。あたいはね、やられたらやり返す主義なんだ。」

鬼は金棒を肩にかつぎ、一歩、また一歩と、ゆっくり近づいてくる。
自分の身体強化、障壁を解除する。殺される覚悟はできている。金棒は易々と私をミートペーストにして、私をエーテル体ごと葬り去るだろう。

「あたいは恨みの残滓だ。それを殺し、黄泉に返そうってのは、あたいを鎮め、救うことになるのかね。」

「ええ、そう捉えることもできます。しかし」

「しかしもかかしもねぇ。あんたは、あたいを救おうとしたんだ。謎解きの掟を怒りでやぶっちまったが、結局はそうなんだ。理由はどうあれ、この殺し合いはそれを意味してんだ。」

ツツジは右手をさしだし、

「あたいがあんたを救ってやる。神霊なんて捨てちまえ。もっと自分に素直に生きろ。」

ツツジは笑った。

この日、鬼と神霊は、人間に生まれ変わった。

第四話・挿話一～浅間山の大噴火後編（後書き）

これで一件落着っと。

力や知識があると、つい歴史に介入したくなりますよね。
でも、それって結構『悪』なんじゃないの。

一話の前半を淡々と硬めに書くことで、神霊の無機質さを書いてみました。
別にてめーらがどう思おうと勝手だからって感じです。

正直、最初の構成が上手くいかなかったんです。
大目にみてください。

次回以降、主人公はほとんどユウメで統一されていきますが、理由は後ほど。

ガンダルフは主人公の真名であり、知られると距離関係なく抹殺できる魔法があることを知っているため、基本的に語られることはありません。ただ、『鬼神の童謡』で簡単にばれるでしょうが。

ちなみに、この時代、まだ魔法世界やアーティファクトはありません。

第五話　妖怪爺との邂逅（前書き）

やっと本編のキャラだせます。
スイスロールやロシアンティーって現地にないですね。

第五話　妖怪爺との邂逅

それを形容するならば、白髪のボサボサ頭、日本人からかけ離れた容貌のローブを羽織った少年だった。だが、どこか浮き世離れした目が、少年の奇特さを一層引き立てていた。

「わしの隠密に気づいておったか。」
「うんにゃ、今さっき見つけたとこよ。それより誰？」
「んぬ、わしはゼクトじゃ。ぶらぶら放浪をしていたら、目隠しをしたお主を見つけての。興味が湧いたから観察しておったのじゃ。」

随分爺臭い口調だ。それに少年の外見にそぐわない物腰、足運びに只者ではない、と直感した。

「そう、ストーキングされて喜ぶ趣味じゃないの。ましてや人外は尚更だわ。」
「お主、わしが人ではないのがわかるのか。」
「ただの勘よ。」
「……。」

『経験からして、こいつは内心考えてるけど顔にでないってところか。馬鹿にはみえないし。』
「私はユウメ、いろんな所を回って、そこで足りない物を調達して生計立ててるわ。肉、野菜から妖怪退治、祈祷まで何でもござれよ。」

「個人で商売しておるのか。」
「ん～、あってるけど全部は言い当ててないわね。生活物資とかは運送組織として活動してるけど、お得意様を作るために無料サービスで悪霊を搾り取ったりするのよ。」
「搾り取る？祓うのじゃろ？」
「祓って黄泉に返しても、浄土にすら嫌われている魂はどうせ碌な裁き受けないだろうし、何より魂が混雑して閻魔の仕事が増えるじゃない。だから、悪霊を構成する魔力を搾り取って消滅させるのよ。」
「悪霊よりえげつないぞ。」
「自業自得よ。」

「話がそれたわね。それで、これからどうするの？どっか行くあてがあるの？」
「ここに来た目的はの、極東の島国の文化を知るのが一つ、地球上の十二聖地の最後の一つを探索するのが一つ、そして極東の勢力を確認するのが一つじゃ。」
『つまり、こいつは海から日本に入ってきて、極東の文化を吸収したいわけか。特に二つ目が本来の目的みたいね。そして、おまけで極東の脅威を偵察する…。妥当かな。そんなに予想とずれないはず。二つ目はなんだろう。たしかにあそこは並外れた霊地ではあるけれど、最も高い可能性は…。わからないわね。それより、ゼクトってサプライズに弱いのかな。だったら、脅かし甲斐があるわね。』
「その聖地で何をするの？」
「いや、聖地の魔力増減の周期を調べるだけじゃ。それ以前に問題が生じての。」
「問題？」

答えは予想がついていたが、そのまま私は促した。

「その『まほら』とよばれる地方、見つからんのよ。人に訊いても誰も知らぬ。風、水の流れから探知しようと試したのじゃが、判明したのは本州全域にある、というアホらしい結果に終わったのじゃ。」

まほらが見つからないのは仕方がない。蟠桃に宿る桃神がまほらに施した結界は、本州全体とまほら全体を表と裏の関係にする複雑で奇怪なものであり、一定の手順を踏むと本州のどこでもまほらに転移する、神業ものであった。だから、普通人間はまほらに入れないし、まほらに入った者は神隠しにあったとされ、その時の状況から禁忌とされる言葉や仕草が語り継がれる。聞くと九割がた間違っているのは、無意識の動きを考慮していないからだろう。

ゼクトに背を向けて声を低くしてささやく。もしかしたら、これは良い商売ができるかもしれない。
少し情報をだして、様子をうかがってみるか。

「それはどこにでもあって、どこでもない場所。そこは不可侵の聖域。其に居座るのは神木蟠桃。三千年に一度実を結ぶ天の柱。その実を食べると不老長寿になる、と言われているわ。」
「急にどうしたのじゃ、ユウメ？」
「そこに辿り着く方法はあるよ。でもただでは教えない。これも、あなたに足りない物だからね。」

ゼクトはユウメの肩をグイッとつかみ回して、正面を向かせる。

「まほらを知っておったのか。本当に知っておるのか？」

すごく食いついてる。まあ、こんな少女が日本の隠された神秘への鍵を知っているとは誰も思えないだろうし、疑うのも無理ないだろう。

それにしたって、顔近い、顔近い！

顔が赤くなるのを見られるのが恥ずかしくなり、見られまいとゼクトの頭を手で押し返す。

私にだって、女心はある、というよりツツジに叩き込まれた。あの大噴火の後、ユウメに姿を変えると、なぜか『可愛いから許す。あたいの妹分にしてやる。』な展開になり、私の不作法ぶりを披露してしまい、さらに気合いを入れたツツジは、私を鬼の御殿に閉じ込めて、やれ女とは、妹とは何ぞやから慎みやら言葉やら作法やら、何もかも短期間で集中レッスンを施したのだ。その所業はまさに鬼。一度脱走に失敗して、一ヶ月間釜ゆでにされた。なまじ肉体が強靭ゆえに、あれには精神を屈服させられた。それからは、もうツツジが姉とするのに拒絶感がなくなってしまった。ただ妹として全てを受け入れるようになってしまっていた。いまやあまり男に化けなくなくなったのも、これが原因だ。ツツジは初めから私の姉だったのだ。そうに違いない。

人、それを調教という。

ぶにゅっと頬を指でさされる。

「聞いておったか。何を払えばよいのじゃ。」
体で、と言いそうになった私は相当てんぱっているに違いない。
「うぅ、そうね～。異国の体術と魔法を教えて。そしたらまほらに連れてってあげる。」
「まほらまでどの位かかるのじゃ。」
「一分もかからないわよ。日本全土がまほらの入り口なの。それで、まほらにはしばらく泊まってもらうけど、それでいい？」
「そうか。ホホホ。お主と出会って良かったわい。では、明朝、村の門で落ち合おう。」
「わかったわ。ではおやすみなさい。」

多分まほらに着いたら、あまりに外と隔絶してるから驚くだろうな～。
ゼクトの顎が閉じない表情を想像してニヤニヤしてしまった。
私って危ないわね。

タンっと地を蹴り、ゼクトは姿を消した。
後ろからまた声がかかる。

「もう起きてらしたのですか。まだ夜は長いですよ。」
「いえ、もう寝るところです。お気になさらず。」

まだ夜は長い。
明日からの生活に期待をふくらませて、寝床に戻った。
眠れるはずがなかった。

第五話　妖怪爺との邂逅（後書き）

ゼクトと取引が成立しました。
まほらを魔改造する予定です。

ユウメの前世の知識は博識といってかまわないのですが、特に素粒子物理学、情報工学、医学の造詣が深い、と設定しておきます。

第六話　経済ムズい、修行キツい（前書き）

ユウメ「そういえば、ＰＶ１００００超えたんだっけ」
アルルン「あっ、はい。そうですね。ありがとうございます。」
ユウメ「でも、冒頭もう少し何とかならないの。ノリが少ないわ。」
アルルン「あの時は迷走してたんで。後悔しても反省しません。」
ユウメ「そのセリフも今後次第ね。自覚あるの？」
アルルン「プロット立てたんで大丈夫だと思う、多分。」

第六話　経済ムズい、修行キツい

翌朝、ユウメはお婆さまとお爺さまにおいとまして村の門まで行くと、ゼクトが待っていた。

「おはよう、ゼクト。待たせた？」
「うぬ、遅いではないか。夜明けから待っておったぞ。」
「それは、いくらなんでも早すぎるんじゃないの。見張りの人に怪しまれるわよ。」
「認識阻害をかけておったから大丈夫じゃったが。」
「そういう問題じゃなくてね～。」

どこか的のはずれた答えを返すゼクト。これから多少の間つきあっていく身だ、この調子だと常識感の齟齬に思いやられそう、と自分のことを棚にあげるユウメ。端から見たら、薄汚れたローブの少年と藍染の着物を着た少女という地理的にも時代的にも珍妙な組み合わせに、すでに両人とも常識を捨てていると思うだろう。それにユウメは気づくことはなかった。

「しかし、先日言っておった、お主が働く運送組織とやらは儲かっておるのか。」
「それはもう、ばっちりよ。私のところ『まほらば』では特殊な方法で移動するから、品物は一瞬で絶対相手に届くし、品物の重量・性質を明確に分別して適正価格で請け負うし、サービスも豊富だからね。それに、物々交換ではなくて銅銭で支払えば一割価格を引いて、銅銭十枚ごとに1ポイントつけてるのよ。儲からないほうがお

かしいわ。」
「んぬ、よくわからんの～。銅銭で支払うことに利点があるのかの。あまり流通してるように見えないのじゃが。」
「これからを見越して貨幣を”買って”いるのよ。今、国内で発行されたばかりの銅銭一文で穀を二十四合買えるんだけど、不作とか飢饉のときは、もしかしたら銅銭三十文で穀八合しか買えないかもしれないでしょ。じゃあ、今貨幣価値が高い内にできることは何？私が出した結論は食料の備蓄ね。独自の方法で保存は完璧だから、組織で穀物を含めた長期保存が効く食料を銅銭で買ってるわ。いざって時に…。」
「あ～、つまり将来大もうけするのじゃな。それにしても随分仕事は楽そうだの。」
「それが結構大変なのよ。依頼は殺到するし、朝廷に目をつけられないように運送規制品目を決めていかないといけないし、他にもポイントの木簡を売買する馬鹿をこらしめたり組織内で会計ごまかして横領する屑を処分したりで忙しいのよ。」
「…すまぬ。勘違いじゃ。ユウメは組織の下っ端の仕事であの村におったのかの？」
「うんにゃ。大きな仕事が済んで、一息つくためにあの村にいたのよ。」
「とても子どもが言うセリフではないのじゃ。」
ユウメは腕組みして「私もそう思う。私がするのがおかしいのよ。でも今回の依頼主は長屋王だったし、若い人がするには荷が重いから私しか適切な人材がいなかったのよね。やっぱり少人数の組織の弊害かしら。」
ゼクトは少女が青年に化けれることを知らなかったとはいえ、、少女が天皇の親戚と交渉する姿に違和感を感じなかった。やはりゼクトは頭のネジが数本とれていたようだ。

珍妙な二人は奇妙な会話をしばらく続ける。

村から歩いて数里のところに切り株があったので、そこで二人は一休みする。

「さて、修行と行きたい所じゃが、どういう方針でいくかの。」
「私、結構特殊な体質でね。精霊に直接命令して魔法がだせるのよ。」
「ぬぅ、俄に信じられぬ。」
「あら、そう？」

ユウメが上に手をかざす。
手から数条の大樹より太い炎の渦が天を貫く。

「これでもダメ？」

ゼクトはユウメが作り出した現象を様々な角度から検討した。ユウメは古代ギリシャ語で詠唱される『燃える天空』クラスの大魔法をノータイムで放った。

それが意味するのは三つ。

第一に、これは厳密には魔法と呼べるものではない。

ゼクトの知る精霊魔法を発動するおおまかな手順は、

?:始動キーで専用魔力ポートを開放
?:詠唱で予めコマンドが完成された呪文を実行
?:術者が精霊に魔力を支払い、精霊に呪文の内容を出力させて発動

本来ならば、始動キーを唱えない無詠唱呪文の威力はたかが知れている。それ程精霊魔法において、言葉は重要な役割を持つ。他、設置型大型魔法陣の痕跡はなし。道中違和感のない仕草で行った儀式魔法という線もあるが、やはり威力に難がある。仏教や道教といった他の体系魔法も、様式は違えど費用対効果は比例するもので、やはり先程の現象を説明できない。

よって、ゼクトはそれが超自然的現象を人間が制御するための法則、魔法ではなく、名付けるとしたら精霊術の類だと理解した。

二つ目に、ユウメが何者なのかについて。

一つ目の考察からユウメは精霊を直接制御できる存在であるとわかった。精霊はあらゆる自然物に宿る霊的存在で、もともと西洋魔法もアニミズムの自然への感謝から由来している。故に、西洋魔法では霊的位階が人間より上の精霊にコストを支払う。精霊をノーコストで使役できるのは、霊的位階が精霊より高い存在だ。よって、『なんだか偉い奴』が人の型をとり、ユウメと名乗っている、と推定できる。
ゼクトは合理的な推論を下し、とんだ娘に出会ってしまったわい、とため息をついた。

「ねえ、なんか言ってよ。」
「お主も人間ではなかったのじゃな。」

草原の風が二人の間を通り過ぎる。

「えっ！？私、人間には見えないの。」

「筋の通った説明はそれしか思いつかぬ。最初は非凡な娘だと思っておったが、さっきの現象は魔法学的に人間が行使したものではない。だから、お主は『神』なんじゃろ？」

娘はあたふた手を振っていたが、手を下ろして息を吐いた。

「ばれちゃったか。もう少し黙っておこうかと思ってたけど。」

「いずれわかることを何ゆえ黙っておったのじゃ。」

「ゼクトを驚かせるためよ。ほら、その表情がなんかおもしろくてね。黙ってたことは謝っておくけど、そんなに深い訳はないから安心して。」

「お主と話しておって、裏があるようには感じなかったがの。警戒はさほどしておらんよ。」

「それはどうも。私は肉体を与えられた神霊で、生真面目に一人で神様やってたんだけど、ある時やってらんなくなって、現在欲望に忠実に人間やってるの。これでいい？」

「なかなか簡潔に半生をまとめたもんじゃな。それでどういった神様なのじゃ。」

「悪いけどその先は、まほらに入ってから話すわ。いいでしょ？」

「うむ、そうか。それで、何の話だったかの。」

「私の修行方針でしょ。」『耄碌してんじゃないわよ。』

「そうじゃった、そうじゃった。もう遠距離魔法は必要なさそうじゃから、ワシが実戦で学んだ体術を教えようぞ。」

式神でまほらに休暇の無期限延長を連絡した後、道からだいぶ離れ、開けた草原に移動し、ゼクトの指導が始まった。

「では、まず余計な魔法を一切解除せよ。」

「次に、そうじゃな。体験してもらうかの。ワシに素手でかかってこい。」

「それじゃ、遠慮なく。」

ユウメがゼクトの顔に殴りかかるが、

「あれ？」

気づけば地面に倒されていた。鼻先にゼクトの拳がピタっと止まっている。

ゼクトはニイっと笑って、

「これが体術じゃ。お互い人ならざる身、ビシバシしごいていくぞ。」

この笑みが地獄の始まりだった。

まず教えられたのは呼吸法。

人生は呼吸で始まり、呼吸で終わる。

どんな状況でも呼吸を続けることで冷静になり、落ち着くことができる。

体に攻撃を受けても、呼吸が痛みをやわらげてくれる。

次に、リラックスを保つために恐怖を克服。
障壁もない状態で首や目の横にナイフを落とすのは、そこらの妖怪より結構リアルな肝試しであった。

その日の修行はそれで終わったが、その後ユウメはハードな生活に結構苦労する。

朝、夜明けとともに起床。

魔法を使わずに薪を調達し、水を汲んできて、朝食を用意する。

朝食後、ゼクトは一日八時間、魔法一般（西洋の他、アフリカやメラネシア等）、ギリシャ語、ラテン語、ヘブライ語、魔法幾何学、魔法算術、旧約聖書などを講義した後、六時間ほど格闘訓練を行う。

治癒魔法さえ禁じられたユウメは、全身打ち身や痣の痛みさえ忘れて、死んだように眠った。

八時間休んだ後、朝を迎える。肉体的にも精神的にも疲れを引いたまま目を覚ますのはユウメにとって久しぶりの経験だった。

ユウメは十分優秀であった。

数日で体術の基礎の形を体になじませ、一人の敵から完璧に身を守る実力を身につけると、次にゼクトは分身の術で自身を二人、三人、四人と増やして訓練した。

次第に壮絶な格闘をこなしていく内に、ユウメはカウンタースタイルを編み出していく。

素手の格闘を終えるとナイフを扱ったトレーニングが始まった。

眼窩、脊髄、気道、アキレス腱を有効に刺して切断する方法を実践されて学んだ。

何回ゼクトに無力化されたかわからないくらいだ。

効果を体験した後、その方法を瞬く間に物にした。

ユウメは目隠しをした状態で、自然体で構えている。

斜め前左のゼクトの動きを感じ、繰り出されるパンチを軽くいなして蹴る。

その直後、ユウメの背面にちょうどいたゼクトが脊髄に向けてナイフを差し出す。

ユウメは慌てずナイフに平行になるよう体に回転をかけ、右手で肘を打ち、左手で顔に掌底。

ハイキックが後ろから飛んでくるが、すでに腰を曲げている。さらに体の軸を動かし、ゼクトの下腹部に右肘を加える。

最後、正面から向かってくるゼクトの首の横に腕を伸ばし、関節でゼクトの首を打ってから押し倒す。

ゼクトもユウメの芸術的な動きを見て感心した。

「最終試験は合格じゃ。もう教えることはないの。」

こうして、ユウメは三ヶ月で死角のない戦闘を可能とした。その後、千年以上も研鑽を続けることになる。

第六話　経済ムズい、修行キツい（後書き）

作者は経済屋でもインストラクターでもないので、本来こういう専門めいた文章は書くべきではないような気もするけど、一応調べてから書きました。

和同開珎は当初一文穀六匁、白米三匁でした（一匁＝四合）が、飢饉の時は白米一匁で三十文になったりしました。

武術は、わかったかもしれないけど、システマです。
でも、システマは約１３世紀に現れたタタールによって生み出されたものらしく、六世紀には存在しないことになります。
なので、ゼクトが編み出したオリジナルとし、それがシステマによく似ていることにします。

次回、ゼクトはまほらの真相に迫る。

第七話　帰り際の決意（前書き）

外伝の関係もあって今回短いです。

第七話　帰り際の決意

ゼクトとユウメは所定の動作をふむ。
草原の景色が一瞬で森に変わり、はるか遠くに天を突くような神木が見える。
どうやら無事にまほらに着いたようだ。二人は虚空瞬動で目的地を目指す。

ごうと風を切りながら、ユウメはいつもの風景を眺める。
濃い原初の大気の香りが立ち込めるまほらは、転生してきて以来地上ではほとんど変わり映えせず、鬱蒼と茂る森林と悠久の草原が広がっている。
神だろうが人間だろうが、自然の偉大さを感じることを再発見したユウメ。
今度は香り草の栽培でも考えてみるか、とぼんやり考えていた。

しばらく黙っていたゼクトはおもむろに口を開く。

「そろそろお主がどんな神か教えてくれぬか。」
「もう少しいいじゃない。あの木のふもとに私の家があるから、そこで話すわ。」
「じゃが、もう三ヶ月も返事を延ばしたのじゃぞい。今答えても差し支えあるまい。」
「仕方ないわね～。私は（多分）魔を司る神で、私の力は『あらゆる魔を創造する力』よ。
随分抽象的だからわかりにくい能力だけど、発想次第では文字通り

『魔神』になれるわ。」

頭の中で想像した魔に関係するものを制限なしで出力できる、と聞けば随分万能に聞こえるが、実際そこまで万能ではない。想像する効果が精密であるほど、できあがる魔法や魔道具は強度、耐久性の高く、忠実な効果を発揮するが、逆も然り。扱いに慣れるまで苦労する能力である。

ゼクトは目の前の人物がいかに理不尽の塊であるかを改めて思い知らされた。常軌を逸する学習能力に反則的な精霊術に加えて、自由自在に魔法具や魔法陣を作れる力には、つくづく世界の不平等を感じた。だが、同時にユウメが世界にどう働きかけるか、さらに興味を引いたゼクトは、

「お主は何を欲するのじゃ。」

「…言ってる意味がよくわからないわね。」

「それ程の力があれば、世界を掌握することができるじゃろ。だが、今もこれからもそうするようには見えんのよ。」

「もしかしたら、気が変わるかもよ。」

ユウメが若干目を細めたのをゼクトは見逃さなかった。瞳は真実を語っている。

「それはお主が一番嫌っておるのじゃろ。」

「……。」
「その力で何をするのじゃ。」
「……これから話すことを信じてくれる？」

さらさらと輝く黒髪から覗かせる二つの泉は、どこまでも澄んでいながらも、窺いしれない深さがあった。

「私はね、前世は人間だったの。
そして、死んであの世に行く前に来世、つまりこの世界に神霊として送られた。
人々が人生を幸せに全うできるようにって。
何百年も人々に施してきたわ。
でも、本当の意味では達成できたとは思えなかった。
だから、今の私の目標は、限定的な環境、ここ、まほらの完成された土地を利用して理想郷を築くこと。何年かかるかわからないけどね。
でも、修行している時に閃いたのよ。」

回り込んで、ゼクトと向き合った。

「もう一度教えて、ゼクト。
精霊、魔物、悪魔、神霊を構成する要素、ゼクトが特殊な粒子と仮定している魔素は、人間が過剰に取り込み続けることで魔物に変化するのよね。」

ユウメの意図をはかりかねたゼクトは、

「その通りじゃ。そのような実例は既に多くの文明の儀式で成功しておる。
じゃが、被験者は例外なく精神に異常をきたし、それ故に禁術となって後世に伝えられることはない。
知っておる者が全滅することも多いしの。」

しばらく目をつぶり、黙考していたユウメは目を見開いた。

「ありがとう、ゼクト。すっきりした。」

屈託なく笑うユウメの背中を赤い夕日が後押ししていた。

第七話　帰り際の決意（後書き）

ゼクトって原作読んでもピンとこないですね。
というか影が薄い。

この主人公、チート能力あんまり使う描写ないから地味にみえます。
でも、これから色々使う予定なので心配ありません。

第八話　空想と現実と理想と（前書き）

こないだ、ディズニーっぽい御伽噺のお姫様や王子様や魔女がニューヨークに現れる映画を観て、ツボに入りました。

第八話　空想と現実と理想と

時代を先取りした和風の屋敷に着地した二人。
観音開きの門をくぐり、中庭の方に入ると石庭が広がっていた。

「どう、この庭は。」
「んぬ、オリンポス神殿やエジプトのピラミッドの永遠や不変を記号化した芸術とは趣が違うのぉ。
こう、個を積極的に主張しない流れる美というか。」
「まあ、そう感じるように作ったからね～。
でも主張しない作品なんて芸術と言えるの？」
「それはそれで立派な芸術じゃろ。
素材の石や松を加工せず、常に移ろう自然の刹那を描き出したこの庭は誠に感嘆するの。」
「ゼクトって日本人？
日本でもそこまで語る人少ないよ。」
「ふむ、これ位語らんで人間は名乗れんぞ。」
「それ当てはめたら、世の殆どが失格じゃない。
あっ、靴脱いでね。」

適当に切り上げて、縁側から座敷に入ると、艶やかな美人が一人、その隣に古墳時代の服の男と西洋のきめ細やかなドレスを着た女が座って談笑していた。

「帰ったか、ユウメ。遅いじゃん。」
「お主が呼んだのに主役がいぬ宴会なんぞ八分咲きじゃ。」

「……。」コクリ

今まで一度も見たことがない様式の屋敷に入ると、中から異常な気配が三人おると気づき、少し警戒しておったのじゃが、何者じゃろうか。

「お三方、お初にお目にかかる。」

それから一通り挨拶を交わしたのじゃが、山と同等の力を持つ鬼？なんじゃ、そのふざけた力は。
ここの巨木の神？相当格上じゃの。神なら仕方ない。
魔界を統率する魔物の妹？召還を通さずに現界できる程位が高いのか、ほうほう…。
こんな化け物を集めてユウメは何を考えておるのじゃ。

何やら宴席に座ってもそわそわし続けるゼクトをほっといて私は話し始めた。

「久しぶりね、ザジさん。もう五十年ぶりだっけ。」
「…。」
「えっ、八十年！そんなに経ってたっけ？」
「…。」
「うっ。手厳しいわね～。それで八十年か。あの頃は色々あって、大変だったわね。」
「あたいもあん時は暴れたもんだ。もっぺんやりたいね～。」
「……。」
「えっ、怖かったっかい。まあ、悪魔に『この悪魔め』って言われた時は腹抱えて笑っちまったけどさ。」
「……Ｇｏｄ　ｄａｍｎ　ｊａｃｋ　ｏｆｆ．」
「あん？なんつった今？」
「……別に。」

ゼクトがそっと私に耳打ちした。

「ザジ殿は先程から挨拶以外、殆ど話しておらぬのに、どうして会話できるのじゃ。」
「そんなの簡単。行間を読むだけよ。」
「……。」
「そう、それよ。」
「…ワシにはできん。」

それにしても桃神って空気よね。前から思ってたけど、その内蒸発するんじゃ…。

「聞こえとるぞ。葦原。」
「うげっ、心読まれた？」
「お主の顔を見とったら大抵わかるわい。それより、わしらを集めた理由はなんじゃ？」

皆静かになって私の方を向いている。まあ、そろそろ頃合いだしちょうどいいわね。

「そうね、では今回みんなに集まってもらったのは世界にとって重要な事を起こす提案を伝えたかったからよ。」
「へえ、世界たぁデカい事を言うね。」
「…。」

酒で赤みさした顔も緊張とせめぎ合って気持ち良い。皆も興味があるようだ。

「以前この場に集まった時、まほらを理想郷にするって宣言したよね。
それに加えて、新たに大掛かりな提案があるの。」

大丈夫だ、私。
これが第一歩だ。

「人類をレベルアップさせるわ。」

桃神以外の皆、戸惑いの表情が浮かんでいる。
そりゃそうだろう。
あまりに規模がでかいし、実現性にも疑問視せざるを得ないし。
でも、ここで説得する必要がある。

「具体的には、魔素を人間に一定量を浴びせて、魔族になってもらうの。」
「のう、ユウメ。ワシはそれは危険じゃと先程言ったはずじゃ。」
「あれは、やり方が粗雑だからよ。
人体に害になるような浴び方とか、体を一時的に精霊と一体になったりしたら、普通の人間は即死するわね。
だから、安全に転生できるようにする。」

ツツジが少し身を乗り出す。
冗談半分で聞いていたが、興味より不可解が先に募ったようだ。

「なんでそんな事をする必要があるんだい。
別にほっといても人間はどんどん歩いていくじゃんか。
特に介入する必要はない。」
「……。」コクリ
「確かにそうね。でも人間は争いを辞めない。
血を流さずにはいられない生物なのよ。
争いを全否定しないけど、無駄な血はもう見たくないの。」
「じゃが、ユウメ。魔族に転生する利点は肉体的な強化位しかない

ぞ。」
「それだけでも十分。通常の物理的な攻撃が通じないし。
それに精霊との親和性も手に入れるかもしれないしね。」
「親和性？」
「精霊には属性ごとに若干分布に偏りがあるのよ。
その偏りの大きい精霊に順応するように魔物は進化する。
それなら、魔族へ進化する際に人間も現場の環境に適応する可能性
は大きい。」

桃神が重い口を開けた。

「葦原。それを人間に試すのはリスクが大きすぎるし、他の生物で
は以ての外。
安全な魔物化は無謀にしか聞こえんわい。」
「試す人間がいなければ、試せる世界を創ればいい。」

しばらくの沈黙。
ツツジはまた昔のユウメに戻ってないか心配になり、酒をあおった。

「……シミュレーション？」
「そうね。実際どうなるかわからないから、魔素を充填させた世界
を築いてみるってのは良いアイデアでしょ。」
「……。」
「うーん、そこよね。地球に近い適当な規模の世界でかつ、世界を
完璧に管理、監視できるシステムとなると難しいわね～。」
「……？」

「いっそのこと幻想異界にするかって？」
コクリ
「シミュレーションのためだけだから、コストを考えるとそっちの方が良いけど、事前に幻想異界に蓄えておく魔力が枯渇したらリアルラグナロクよ？」
「……。」
「今どっちか選べ、はさすがにキツいよ、ザジさん。」

まだまだ具体性に乏しかったかな。
まあ、今日思いついたことだし、明日また話せばいい。
今夜中に自分の起こす行動を洗いなおしてみるか。

そのままユウメの提案は是非も決まらず、宴会もお開きになった。
深夜、ユウメは屋敷から離れ、蟠桃の大枝に静かに降りた。
今宵は二十二年に一度の特別な日、大発光の夜。
天柱が光の柱となり、辺り一面を白一色に染める。
そして、柱に支えられた天空には銀の帳が降り、真円を描く月が地上を煌々と照らしていた。
思わず見とれてしまったユウメは、自分の目的を思い出し、両手を月に差し出して唱えた。

『八咫の水鏡』

両手から光が溢れ、両手に収まる円盤が形づくられた。
神霊は鏡に願う。

自分が起こしうる、これから起こる未来を映したまえ。

水鏡は程なく月を映さなくなる。

唐突に赤い星が現れる。
徐々に地上にズームアップするにつれ、風景が霞み、緑豊かな大地に取って代わる。

水が波打つ。

天空に浮かぶ無骨な岩、その群に勇壮と建つ白い尖塔と石組みの城。

波が盆の端から跳ね返り、中央に集まる。

広大な森林に悠々と舞う巨大な竜、翼が鏡を横切ると、二つの月、フォボスとデイモスが見える。

水面が新たな波紋を描く。

次々と人が現れては消える。
人、人、猫族、人、犬族、人、人、人、虎族、小鬼族、水牛族、人、
イルカ、ゴリラ。
街はホタルのような仄明るい緑の光に包まれ、あらゆる種族が笑い、
生きていた。

瞳が鏡に引き込まれる。
一旦映像の途切れた後、白い瞳がガンダルフを見つめた。
その視線から逃れることは叶わなかった。

淀んだ闇が炎に薙払われる。
火に包まれた村で地獄が広がっていた。
逃げ惑う亜人が次々と敵に切られ、焼かれ、刺される。
敵は身にまとう甲冑を血に染め、恍惚と槍の穂先、角をもがれた生
首を舐める。
男は耳と鼻と陰部を切り取られ、舌と目をくり貫かれてから首を落
とされる。
女も子供ですら犯され、同様に殺された。
炎は踊り狂い、全てを舐め尽くした。

首にじとっと汗が流れ落ちる。
もうそんな光景は見慣れたと思っていたのに、動悸が激しくなって

いた。
だが、彼女は逃れられない。
貪欲な未来の光が彼女を飲み込んでいく。

海は荒れ狂い、嵐は全てを消していく。
海も陸も全て等しく塵に帰り、赤茶けた大地が剥き出しになる。
既に声を上げる人間はいない。

鏡は熱を持ち始め、煙が出始める。

平和な日常が異世界から破られる。
地球の十二カ所から同時に光の柱が建ち、そこから大量の人が流れ出る。
彼らに理性は残されていなかった。
難民に認定されなかった彼らは各国の都市を攻め落とし、国の機能を低下させた。
飛び交う怒号、混乱する政治。ついに軍隊が彼らを攻撃する。元々統率の取れていなかったようで、すぐにゲートの向こうに追い返される。

めまぐるしく移ろう映像から靄が消えた時、人々は火星で戦っていた。
いや、もう人と呼べるかわからない者たちの戦いだった。
ＲＰＧに撃ち抜かれても平気で立ち上がる地球人と、魔法と科学が融合した不可思議な力で対抗する火星人が戦っていた。

息を荒げ、顔を鏡に近づける。
鏡がフェードアウトし、仄暗い水の底から浮き上がって見えたものは、腐った自分の髑髏だった。

盆が手から零れ落ちる。
水は沸騰して一滴も無くなっていた。
鏡はそのまま砕け、宵闇に吸い込まれていった。
手を胸に当て、私は自分の愚かさを呪った。
あれだけ言っておきながら、その行動の結果を予想していても、映し出された予測は遥かに生々しいものだった。
それに恐怖したのだ。自分は。
背負う覚悟が足りなかったのだ。
そんな自分に反吐が出た。
もしこんな奴に世界を創られたら目も当てられないことになるだろう。
眦から久しく落ちたことのない露が頬から流れた。
熱い目頭をこすり、軽く鼻を啜った時突然後ろから優しく抱きつかれ、身を強ばらせる。

「どうでしたか、ユウメさんの未来は。」

声からしてザジさんのようね。
ポーッとしているかと思いきや、心を見透かしたかのように話しかけるからドッキリしちゃうじゃない。
さっきの見られたら恥ずかしいなー。
一応強がってみるか。

「べ、別に何でもないよ。」

あっ、噛んだ。

「悪魔に嘘はいけませんよ。」
「妹に隠し事はつき物よ。」
「交渉相手に隠し事を明言するのは下策です。」
「ええ、ええ。そうですとも。
何百年も生きた神が情けなくもびびっちゃっただけよ。」
「ユウメさんが人間として生きている限り、やはりユウメさんは人間です。」
「それがどうなのよ。」
「ユウメさんは支えられているのですよ。こっちを向いて下さい。」

振り返ると、みんなが立っていた。
私の表情を見て、ほっとしているみたいだ。

「妹の考えていることは全部わかるさ。
昔のあんたは死んで、今はあたいの妹だからね。
面白そうだからのってやるよ。」
「お主のやることは、薄い刃の上を渡るようなもの。
刃の先には戦争根絶と人間の新たな繁栄、刃の下は底なしの戦争じゃ。
じゃが、お主は止まらぬであろう？」

「ワシの宿る木が平和に利用されるなら、ワシもお主に一つ賭けてみようぞ。」

みんな…。

「ユウメさんは良い仲間を持っていますね。私もそれに加わってもいいですか？」

こっちから魔界に攻め込んだのに？

「ユウメさんが来るまでは私は腑抜けでした。
本分の仕事は部下が全てやってくれましたし、私が現界したら大惨事になりました。
そんなわけで、まどろむ怠惰な闇から引っ張り上げてくれたのは、他ならないユウメさんなんですよ。
恩を返すためなら私はユウメさんと地の果てまでご一緒しますよ。」

嗚呼、私はなんて恵まれているんだろう。
これから私がする事は、間違いなく多くの人が死ぬ。
それが幻想異界だろうが、死は死だ。
怨恨と憎悪の鎖が私を雁字搦めに縛りつけるはずなのに、みんなそれをわかっていて付いてきてくれるなんて。

「……ありがとう。もう、私はブレないわ。」

「よーし。そんじゃ二次会やるか。」
「…。」コクリ
「ワシも聖地観測初日がこれじゃから眠れんわい。」
「フォッフォッフォ。」
「えっ、ちょっ、ちょっと待って。私そんなに強くないし。もう良いじゃん。」
「姉の言うことは聞くんじゃないのかい？」
「…はい。」
「正解。」
『ユウメを酔わしたら、あんな事やこんな事を…。ムフ、フフフフ。』
「今、なんか神のお告げが逃げろ、て叫んでる。逃げなきゃ。」
「いや、お主神じゃろ。」
「…。」
「もうおそーい。」ガシッ
「いやあああああ。」

すっかり泥酔したユウメは、ツツジの玩具になったそうな。

第八話　空想と現実と理想と（後書き）

世界を創るって倫理的にどうだろう。
気にしたら負けって感じかな。

第九話　開発しよう　その一（前書き）

ＧＷをいかがお過ごしでしたでしょうか。
私は高野山金剛峰寺の奥の院まで参拝してきました。
お寺の地下にもぐるのはあまりない体験だったので、楽しかったですね。
ガイドさんに参拝方法を聞いてビックリ。
俺、作法間違ってたよ。（´・ω・、）ショボーン
地蔵に水をぶつけていた人もいましたが、あれも間違っているみたいですね。
リサーチ、ブリーフィングは大事ってことですね。

第九話　開発しよう　その一

んっ…。朝？いや、もう昼？
ぼんやりと目を開け、体を起こして胡乱と見回す。
いつの間にか奥の寝床で寝ていたようだ。
すぐ脇でお姉様が寝ている。
極楽に喚ばれたような笑顔で幸せそうだ。
余程良い夢でも見ているのだろうか。

なんか肌寒いのはなぜだ？
顎を引いてみると…、

右肩が見事にはだけていた。
白い肌が心なしか汗ばんでいる。

ええっ！？私いつから仁侠みたいになってんの？
ヤバいわね～。こんな所誰かに見られたら、マジでまずい。

「お～い、ユウメ。もう昼じゃぞ。」

ぎちぎちと振り返ると白い少年が、襖を開けていた。

お互い目が合う、見つめ合う。

時がしばし凍りついて空気も冷たい。

私は恥じらうか悲鳴をあげるか怒るか1ミリ秒迷い、自分に素直に動いた。

「ま、待て。話せばわかる。落ち着くのじゃ。」
「入る前に言えー！！」
「！！！『最強防護』ッ！！」

パッッッキャャャャアアアアアアアァァァァァァァン

肉体強化版システマで洗練された拳に、サンスクリット語と八卦とギリシャ語で紡がれた攻撃特化魔法陣を上乗せした渾身の一撃が、易々と幾十の障壁を食い破り、ゼクトの頬を捉える。

「男なら素直に喰らいなさいよ。」
「いや、ワシまだ死にとうないし。」

障壁分を差し引いても十分お釣りが返ってくる衝撃を、ゼクトは経験から培った反射で緩和させ、錐揉み状に二回転捻りに背面宙返りで軽やかに着地。
体を張ったギャグは息のあった達人のみができる芸当であった。

この妖怪爺、顔面殴ってもケロリとしているからイラッとしたけど、程なく謝ってきたので許した。
それにしても、スッキリしたわ～。
もしかして私、加虐嗜好系だろうか。
それはそれで良いかな、と私は気楽に考えた。

この当時、非常に珍しい一日三食の葦原家も、今日は朝昼兼用の精進料理となった。

「では、今日も大地の恵みに感謝して、頂きます。」

日本の神、西洋の妖怪と悪魔が一同に座り、作法は違えど食べ物に感謝して食事をするほのぼのとした光景は、ひとえにまほらの加護がなせる物かもしれない。

箸を動かしている私にゼクトが話し掛けてきた。

「見よ、ユウメ。やっとハシを使えるようになったぞ。」
「わぁ。すごい、ゼクト。もう完璧じゃない。」
「ふふん。次は流行りの七宝焼きじゃな。」
「ちょっと、箸からぶっ飛んでるんじゃない？」

少年が可愛らしく小首をかしげているが、私は騙されない。

どう考えても段階を数段飛ばしている。
それは日本を知る上でよろしくないだろう。

「そうかの～。まだ早すぎるかの。」
「うん。そう思うわね。」

もっと身近な事を身につけて、時間があるんだから焦らないようゼクトに説得した。
納得してもらった所で、本題をぶつけた。

「あのね、ゼクト。私、幻想異界を作る方針考えたんだけど、しっかり聞いてね。」
「ふむ、言ってみよ。」
「幻想異界を一つの大きな魔法システムと考えたの。で、それ全体のプログラミングは一気にできないから、まずプログラムを効率的に作成できるようにしたいのよ。…」

内容を要約すれば、システムを作るための制御システムをまず作る。その制御系はラテン語をソースコードとし、インタープリタ及びコンパイラなしで、直接モジュール化されたプログラムにコマンドできる仕様だ。

「これは私の能力ですぐに作れるから大丈夫よ。」

ここで言うプログラムとは、西洋魔法陣だ。
魔法の内容を図形的に記述する魔法陣は、ユウメにとって便利な機械語であった。
そして、その制御系を用いて幻想異界という巨大ソフトウェアを開発するのだが、煩雑なプログラムを透明化させるため、一連の魔法陣群をモジュール化して物理現象を簡易制御できるようにする。
その後、シミュレーションの目的に沿った環境変数を幻想異界に設定し、目的の情報を制御系にキャプチャリングするソフトウェアを内蔵させる。

さらに、幻想異界の中の生物に世界の秘密を気づかれないようにするために、できるだけバグのない完成度の高いシステムにしなければいけない。
しかし、完璧なシステムは作れるはずもなく、その対応策として、自律デバックシステムを作ろうと考えた。
制御系を一定の制限付きで使用でき、世界を管理、修正し、時に危険分子を排除する存在が必要なのだ。

「んぬ～。細かい部分はさておき、ムチャクチャ時間かかるのではないかの？」
「ええ。問題は時間よ。ファンタズマゴリアと違って、実在世界と中身まで同質にするんだから、膨大な魔法陣が必要ね。」
「どれくらいじゃ？」
「浜の真砂よりは。」

そこでゲーって顔しないでよ。
桃神もあきれた顔してるし。

後で覚えとけ。

「のう、ユウメ。そこまで無理難題に挑む理由を聞かせてくれぬか。」

「いや、ただ人類が到達できない所業をしないと神としてダメかな〜って。」

『アホじゃ。天下一のアホじゃ。
石をライ麦パンにするより遥かにバカじゃぞ。』

二人の会話を静かに聞いていた他二人（ツツジはまだ寝ている）も、

『数千年食っちゃ寝して、黄泉の国から本借りて過ごしてたワシ、正直駄神やもしれん。
はっ、もしや葦原は暗にワシの怠惰を非難して、馬車馬のごとくワシをこき使うつもりなのか。』

『あー、この流れは私達に仕事増やす感じですね。
悪魔の勘が【過労死】をビシビシ訴えてます。
一体どうなるんでしょう。』

「うーん、それで一人でそのシステム、というか儀式魔法作ろうとしたら、丼勘定だけど二十年はかかると思う。」

「ユウメは多少無理できる体じゃろ？」

「訂正するわ。人間的な生活度外視、神速でひたすらシステム構築に費やして二十年ね。」

「ｏｒｚ」

「……。」

「私も何年かかるかわからない物にやる気は続かないから、せっかくだし、手伝ってもらうわよ。」

食べ終えた皿を一枚ずつ積み上げていく。

「まずゼクトとザジ。あなた達はシステム構築を手掛けてもらうわよ。」
「……難。」
「同感じゃ。かいつまんでも、構築の根幹が、プログラミングなるユウメの前世の知識に基づいた物なのであろう？魔法関係からかけ離れた技術は、ワシ等はお手上げじゃぞ。」
「何も急に私と同じレベルを求めはしないよ？ゼクトの修行みたいにするから。」
「…実は根に持っているのかの？」
「クスッ、そんなわけないって。ただ、人手不足は事実だしね。それに、短期間学習はできればしたくないのよ。」
「短期間？早いならよいではないか。」
「頭に金属棒を挿して、脳に電気信号で強制的に知識をぶち込んでシェイクするのよ？」
「長期間でお願いします。」

「ゼクトは何周期かまほらにいるんでしょ？観測とかの合間に手伝ってくれたら良いわよ。」
「あいわかった。」
「ザジは千年間、私に優秀な人材をその時に必要分貸して。代価は、そうね～。神話級五点で。」
「……十五。」

「七」
「十三」
「九」
「十一」
「じゃあ、十点で決まりね。」
「…。」コクリ
『武器一点一点が神話級だから、高くついたわね～。でも、どんな手段を使っても人材はいるわね。いずれ人間界も考えてみるか。』
『この交渉で、最上位の悪魔の権威は絶対的になって魔界は安定する。
ならば、優秀な悪魔を多少貸しても問題ない。』
「はい、交渉成立。」

軽く握手を交わす。

「悪魔なんぞ何に使うのじゃ。」
「主に、人間では活動不可能な環境下で働いてもらうよ。」

ザジが眉を少し吊り上げたが、スルーしておこう。

「では、お開きの前に定礎をお見せいたしましょう。」

両手をグウにして結んでから、直線に伸ばして開く。

ユウメの両手から鮮やかな虹が溢れ、鈍く黒光る全長二メートル、柄に焔星を象った南京錠が現れた。

『造物主の掟』

新世界を創造する鍵である。

第九話　開発しよう　その一（後書き）

幻灯『ファンタズマゴリア』は、１９世紀のプロジェクターの祖先で見世物だったようです。

第十話　閑話その一　ユウメのしわ寄せ　前編（前書き）

まさか、プロットが本家とかぶってしまうとは…。
いや、なんでもないです。
最近ゴマとかＤＨＡのサプリメントにはまっています。

第十話　閑話その一　ユウメのしわ寄せ　前編

その鍵はひとりでに宙に浮いて、みるみるうちに小さくなった。

「随分質素じゃな。」

「機能美って言ってよ。」

鍵を掴んで、ゼクトに投げ渡した。

「それ、今は形だけだから土産物程度の魔道具だよ。」

ふーん、と縁側に寝転がって、光にかざす白い少年。

魂を吸い取るかのような玻璃は黒い鍵を透かして、まだ見ぬ幻をぼんやりと捉えていた。

一体どこまでわかっているのか藍染の少女に知るすべはなかった。

あらかた食器を片付けた後、私は桃神に呼び出されて嫌な予感がした。

書斎に入ると、八畳間に座布団が敷かれており、奥に修羅が鎮座していた。

手前に座れ、と顎で指され、静かに正座した。

「ここに呼ばれた理由はわかっておるか？」

「はい。」

どうやって隠していたのだろうか、後ろから紐でくくられた木簡と巻物の束の束の山が目の前に投げ出された。

やっぱり…。

じとっと嫌な汗がでた。

いつもは温和な初老も、今日は大きく見えた。

「三カ月。三カ月もよ。
お主は職務放棄を式神一つで通達し、あまつさえ昨日まで音信不通にするとは何事ぞ。
ツツジはお主を信じて気にしておらなんだが、ワシは違うぞ。葦原。」
「…はい。」

返事がお気に召さなかったらしい。
上位神格に見合った魔力が私にじりじり纏わりつく。
マジでマズい。
後もう一回下手に応えたら、多分蟠桃の養分にされる。

「賢いお主ならわかっておるじゃろう。
一度流れ始めた水は容易に止まらぬことを。
『まほろば』は既にあらゆる所に顔をきかせておる。
その頭であるお主が、私用で抜けるなど言語道断。
ワシが臨時で指揮せねばならぬ事態に陥ったではないか。
確かに、お主が動けぬ場合を想定した対処は、お主とワシで決めたことじゃ。
が、こんな些末事のためにあるのではない。
お主の配下の妖怪や人間が随分慌てふためいたものじゃ。
人の上に立つことができん者が世界の上に立てる道理はない。
それを言いたかったのじゃ。」
「ご心配をかけて申し訳ありませんでした。」
「謝罪は聞きとうない。それより、この山積みの依頼をどう処理するか、責任をとるか。」
「…火急の依頼は済ませていますか。」
「うぬ。ここにあるのは、期日が長いものばかり。
とはいえ、もう締め切りが目前の物が大半じゃがの。」
「七日で片付けてきます。」
「三日じゃ。」
「えっ。いくらなんでもこの量は。」
「何、簡単なことよ。
寝ず食わずで動けばよい。
その程度、軽くこなす精神は持っておるはずじゃ。」

いや、運ぶだけなら一日でできるだろうけど、全部帳簿につけないといけないんだよ。
絶対腕吊るって。

「ほれ、早よいかんか。
三日以内で済ませねば、結界から追い出すぞ。」

うわぁ。ここに鬼がいる。
自業自得だけど、なんか悔しい。

桃鬼が指をパチンと鳴らすと、彼の影からぬっと座敷童が現れた。

「な～に、主さま。」
「こやつを見張っておけ。後、手下を使わせるな。」
「は～い、わかりましたぁ。」

彼女はすっと私の影に飛び込んだ。

「ああ、もう。昨晩協力するっていったじゃない。」
「それはそれ、これはこれ。お主の好きな言葉じゃ。」

私は巻物の束をむんずと掴んで脱兎のごとく転移した。

この二日、情けない目に遭ってるな、と自分を呪いながら。

結果的に、ユウメは期日に間に合った。
ただ、これによってユウメは一週間寝込んだことを付け加えておこう。
なぜなら、どの依頼人も手下では手に余る者ばかりだったからだ。

『まほろば』は表裏問わず有名だ。
あからさまに危険な物品以外、例えば、一見用途が分かりにくいけど実は誰かを呪い殺す呪具ですら一瞬で確実に運ぶのだ。
さらにサービスも充実しているなど、これほど重用したくなる物はない。
老若男女貴賤善悪を問わず、知る人ぞ知る便利屋であった。
そして、ユウメをぐったりさせた原因がもう一つある。
では、その一件をここに記そう。

私が青年商人姿で都の貴族の某の屋敷を訪れ、依頼を完遂した後のこと。

「実は折り入って話がある。」
「はい、なんでも申し上げなさって下さい。」
「一月前から鬼がでるようになっての。
朝になると人が何人も殺されておる。
衛士が捜索しても一向に捕まらんどころか、何人も犠牲になっておる。
どうにか今日か明日には退治してくれんだろうか。」
「そんなに急ぎでございますか。」
「ああ。帝がおいでになられる行事が行われるのは明後日だ。
それまでには万全を整えたい。」
「それでは何ゆえ衛士から依頼が来ないのでしょう。
昨日とある件で向こうに伺ったのですが、何も言いませんでしたよ？」
「彼らにも面子というものがあるのであろう。
警邏の本職が一介の運び屋に頼むわけにもいくまいて。」
「あはは、確かにそうですね。ところで死因は？」
「綺麗に斬殺だよ。首だけが竹の節を割ったように斬られておった。」
「達人の人斬りか、それとも妖怪か。どっちにしても面倒ですね。」
「別に報酬は払う。なんとかしてくれ。」
「わかりました。後ほど伺います。」

スッと霞むと青年の姿は瞬く間に消えてしまった。

「あれは取り込めそうにないな。」

男はポツリとつぶやいた。

葦原ユウメは苛立っていた。
こんな忙しい時に、わざわざ時間を割いて妖怪退治を引き受けた自分のお人好しにうんざりしていたのだ。
期日は残り一日を切っている。
残りの数十件を消化した後、すぐさま都に転移する。

時は既に丑の刻。
草木も眠る真夜中である。
都の見取り図に、今まで死体が発見された場所にバッテンをつけ、規則性を探す。
ユウメは犯人が路地裏を通っている可能性が高いことを点の軌跡からすぐに見つけ、外周に沿って徐々に内裏に近づいていると判断した。

しかし、犯人の動機が見えない。
金目狙いの夜盗ではないのは、どの死体から金品が盗られていないと邸の主が話したことから明らかだ。

では、気が触れた人間の仕業だろうか。
いや、そういう奴は後先考えずに暴れるだけ暴れてすぐに自滅する。
よほどの手練れなら別だが、彼らは感情で殺す人達ではなく、金にならない殺しもしない。
残りの可能性は、もう妖怪しか思いつかないが、竹の節を切ったような、鮮やかな切断を可能とする妖怪がいただろうか。
剣を使う一族に烏族がいるが、あれは叩き潰す剣を使っている。
鮮やかな切り口は再現できない。
剣鬼の中には、誠に鬼神と呼べる者達がいるが、彼らはそこに居るだけで都を汚染する。
神霊であるユウメが気づかないのもおかしい。
ちなみに、ツツジもその一人だが、人間の形を取って能力を制限し、ユウメがプレゼントした『祓いの腕輪』で汚染が完全に防がれている。

西洋、仏教、神道の三重探索魔法を使うこと二十三回目。
ようやく微弱な警戒信号を受け取った。
ふと目を付けた西門を少し入った路地裏に、それはいた。
髪は黒、顔は少し痩せ気味、見た目十二の少年。目がヒステリックを含んでいる。
場違いな詰襟の制服が異常に浮いているが、余計に際立っているのは足下の血溜まりと猛烈な鉄の匂いだ。
狂気を纏う両目が私をしっかと見つめている。
今、姿をユウメに変えているから、普通は少しは油断してくれるだろうか。
あくまでリラックスした物腰で少年に近づく。

「はじめまして。あなたが犯人？それとも通りすがりの追い剥ぎ？」

「……。」
「ええ、だんまりか～。悲しいな。その格好じゃ怪しんでくださいって言ってるみたいだよ？」

この際、自分の服装は棚上げだ。

「ねえ、なんか言いなよ。」
「…悪いが見られたからには死んでもらう。」

少年が短刀をだすと、私に突っ込んできた。
躊躇ってくれないことを残念に思ったのち、重心を落として攻撃に備える。

「『閃鞘・七夜』」

念のため、対物対魔障壁を曼荼羅状に展開していたが、短刀はまるで紙切れのように障壁を切り裂き、首に迫った。
以前の私なら残機が一つ減ってたわね、と自分に苦笑いし、体軸を軽くずらした後、突き出された左腕を右掌底でそらして肘を膝で打ち上げ、そのまま左肘に体重をのせて顔面を痛打。
取り落とされたナイフを蹴り飛ばそうとしたが、いつのまにか少年の手に戻っており、距離をとられている。
内心、少年に対する警戒度を五級から四級にあげた。
まともに攻撃を受けた割には足取りがしっかりしているし、なにやら障壁を抜く技術をもっているのだ。

物理ダメージを無効にする体でも油断はできない。
裾から短刀をとりだし、少年を迎撃する。

「面白いね。さっきの肘打ち効かなかったの？」
「効いたよ。そんなにちっさい体なのに重かった。」

話している間でも剣戟は止まらない。
体術では私の方が上だが、少年の虚をつくような足運びとナイフ捌きにイライラする。

「だいたい今、誰と戦っているのかわかってんの？」
「そうだね。点が見つからない少女…かな！」

おっ、すごい。一瞬で六回蹴られた。

「なんでそんなにケロリとしてられるんだい？」
「さあね～。負けてくれたら教えてあげる。」

戦闘がちょっと長引きそうね。
今の私ではあまり近接に慣れていないし。
このままだと近接戦で決められる。

「『十星』！！」

少年の輪郭がぶれ、全身の関節に衝撃が走る。
痛みはないけどペース持ってかれたなぁ、とぼんやり考える。

「これで終わりだ。」

押し倒された後、私にとどめを刺そうとナイフを振りかざした少年は、藍染の少女ともう一度目が会う。
それが彼女の策にはまる。

「あ〜あ、目が合っちゃったね。」
「なっ！？」

彼女の黒い瞳に少年は吸い込まれ、夢幻の世界へと誘われていった。

「ほんと、この頃ツイてない。」

ご丁寧に都の戦闘被害と時間節約を鑑みた戦略であった。

第十話　閑話その一　ユウメのしわ寄せ　前編（後書き）

ユウメの警戒度

五級　ふつうの人

四級　一般兵士　ザコ妖怪

三級　武芸の達人　高位の魔術師　中級妖怪　下級悪魔

二級　高位の武人（肉体強化済み）　鬼　上級悪魔（魔王除く）

一級　鬼神（ツツジなど）　魔王（ザジなど）　上位神格（桃神、ユウメなど）

特一級　ヤズマット　創造主クラスの神達

第十話　閑話その一　ユウメのしわ寄せ　後編（前書き）

生きることに疲れたことはありませんか？
作者は現在進行形ですが、どうにか乗り切ろうとしています。
あ～、サプリ飲まないと死ぬ。

第十話　閑話その一　ユウメのしわ寄せ　後編

今、オレの目の前には炎の海が広がっている。
中央の太陽に向かって延々と延びる光の橋を境に左手は紅い海、右手は蒼い海となっている。
炎が海となっているだけに気温はもう計り知れないもので、高度数千メートルにいるはずなのに遠近感が思うようにとれない。

「また同じ風景か。」

太陽と業火にローストされるのはオレの趣味ではないので、能力の応用で余分な光量と温度は遮断しているのだが、慰めにしかならない。
つい先程、これを軽く凌駕する熱線に貫かれて死んだ。
死ぬ感覚を語るのもおかしいが、実際痛みとかはなく、気づいたら殺されていた、みたいな感覚だ。

では、オレを何度も刈り取る死神は誰か。
もうそれは目の前にいた。

「ヤッホー、まだ粘るね。これで６３回死んじゃったね。気分はどう？」
「もう自分が生きているのか死んでいるのか麻痺してきたよ。」

なぜオレはコイツに出会ってしまったのだろう。
最後に覚えている都の出会いからもう何日、いや何週間か。
時間感覚はすでに摩耗して、思考も段々単純になってきている。

早くオレを殺してくれ。

「……まだわかってないみたいね。」
「何がだ。お前に絶対勝てないことか？」

オレ、田口良平は異世界召還で、自らネギまの世界を選び、この世界の猛者と同等以上に渡り合う力を神に求めた。
前の世界では、そこら辺の中学生だった。
まだ汚れに染まっていない鞄、真新しい教科書に詰め襟の制服。
ちょっぴり大人になったかな、と気分だけでも味わおうと、塾の帰りに本屋で立ち読みしていた。

多少はマセた頭をフル稼動して『人間失格』を読み進めたが、敢え無く撃沈。
あんな歪みまくった罪悪感に付き合ってられるか、と隣の本棚に目を向けると、少年誌の単行本が並んでいた。

海賊王、マダオ、薄幸探偵少年、血の月曜日、あちらこちらに目を踊らせていると、ふと一冊に留まった。

開いてみると、初めはしょうもないラブコメか、と落胆した。だが、今まで見てきたマンガの中で見たことがない背景の精巧さに魅せられた。
現代のマンガはこれほど緻密に描かれているのか、と感心したのだ。

そして、主人公のとんでもないドジ設定には目をつぶるとして、よくよく健気に歪んだ少年だと思った。
それでいて、非常に気の毒に思った。
あれはおよそ子供が送る生活ではない。
これでは唯一のアーキタイプ、オールドワイズマンたる英雄の父親にすがりつく訳だ。
それが彼の孤独を紛らわす薬であり、彼に孤独を作り出す毒であるのは何という皮肉。

他にも色々な描写やセリフを読んでいくうちに、きっとネギは一生ナギに会えるかわからないな、と考えた。
おそらくナギは肉体に縛られた存在は辞めている、と推測した。
何にせよ俗なハッピーエンドはないな、と次に立ち寄った時の予算を組みながら帰路についた。

家の玄関をくぐると白い部屋にいた。
距離感のつかめない、壁も天井も床も白い空間で戸惑いを隠しきれなかった。
その後、見えざる神の声としか説明しようがない声が聞こえてきた。
汝は何を望むか。

多分オレを驚かすドッキリだろう、と今思うと殴りたくなるような単純思考で結論をだし、敢えてそれに乗るという愚行を犯してしまった。

そして、オレは暗殺術の知識、技量と『直死の魔眼』をもらった。
そして、こう言ってしまったのだ。
『作中の人物が生きている時代、場所に送ってくれ。』と。

オレは送られた直後に後悔した。
建物、牛車を見て、およそ千年前の日本と気付いた。

絶望した。

千年前に生きてた奴なんかいたか？
エヴァでも中世ヨーロッパなのに、この時代の日本にいたか？

どう頭を捻っても答えはでない。
いないならいないでなんとかすればいい、と楽観視していたが、召還条件に不老化を入れていなかったオレは、自分の予想できる末路に沈みに沈んだ。

日も沈んだ頃、オレは目立たないように裏路地を走った。

神は情け深くも、オレに汚れない制服と錆びないナイフを与えた。
が、それ以上に食べ物が欲しかった。
早めに不老化したほうがいいな、と考えていた矢先、何人かに囲まれてしまった。

その後は悲惨だった。
気づいたら屍の上に立っていた。
これはヒト？
死んでいる、殺されていた。
ダレに？
オレが、違う、オレじゃない。

オレの力は生きる上でクソの役にもたたなかった。
それから、あまり良い思い出はない。
一カ月の間に盗み、殺し、脅し、とオレの知っている悪事を全部やった。

ただ生きるために。

「アナタは…どうしたいの？」

はあっ？と声をあげようとしたが、瞬きすると少女は消え、頬に酷い衝撃が走る。

「グッ…、カハッ。」
「その力はモノを壊すには一流だけど、」
横に吹き飛んだ体に少女の足が追いつき、脇腹に蹴りを叩き込まれる。
ズンッ、ミシミシ、ベキ。
「ガアアアアアアア。」
「技の使い所、経験、理解が全く足りない。
さらに付け加えるなら、」
落下する前に首を掴まれ、眼下の地獄にぶん投げられた。
痛みに灼かれ、焔に焼かれた。
「…ァア、……。」
「近接戦に特化した力だから、戦術が限られてくる。
対遠距離攻撃がたった一つとは、一流を目指すのなら絶対の壁ね。
防御も薄いし。」
ふわりと紅蓮の海に降り立った少女は、少しよれた愛染の着物を整えて、こちらへ歩いてきた。

彼女の白い裸足が酷寒のせいか幾筋も裂け、紅い蓮のような血が流れている。

「ここ、面白いでしょ。
燃えているのに凍傷する火なんて滅多にみれないよ。」

この空間は彼女が作り出したのだろうか。

「あ〜、これは私の心象風景の一つなのよ。」

お前も召還されたのか？

「ちょっと違うかな。
あなたみたいに記憶を持って来たわけじゃないよ。
前世の偏った知識はあるけどね。」

お前はオレにどうして欲しいんだ？

「それは自分で決めることね。アナタのお守りじゃないから。でも、選択肢はある。」

人殺しのオレに選択肢なんてあるのか？

「一々細かいね～。
そんなに気にするなら出家しなよ。
背負える覚悟がないなら、此の場で精神的に死んでもらうだけ。」

だから、背負え。
殺された人の喜びも悲しみも怒りも、全て背負え。
それが、ツグナイだ。

「…オレに何が残されている？」
「プランAは、殺人以外の記憶を消して、現地で生涯を終える。」
「保留。」
「プランBは、今ここで死ぬ。」
「論外。」
「プランCは、私についてくる。
希望するなら、不老にできる。」
「…不死じゃないよな。」
「厳密には有り得ないよ。」
「なんで？」
「だって、アナタがいるじゃない。」
「それもそうか。」

オレは生きたい。
この世界でアイツらに会いたい。

「お前に一生ついて行くよ。」
「うーん、可憐な幼子にコクるのは頂けないな～。」
「なっ、お前が仕向けたんだろ。」
「初々しいわね～。
やっぱり少年なんだ。」

異世界にきて、ようやくマトモな会話をした気がする。
今この瞬間、肉体の痛みを全て忘れて彼女を見る。
そういえば、まだ名前も知らなかったな。

「オレ、田口良平って言うんだ。よろしくな。」

彼女の澄んだ瞳が、オレの眼を覗き込む。
額と額がくっつく。
心臓が高鳴っているのが、はっきりわかった。

「良平か。そうね、これから諒と名乗りなさい。」
「諒か。わかった。」
「私は葦原ユウメ。といっても偽名で、本名は誰も知らないわ。でも、異世界の誼で教えてあげる。」

そっとオレの首に腕を回し、耳に甘く囁かれる。

魔を操り精霊を従える唯一の神霊、ガンダルフと。

「諒に対してヒドい仕打ちをした神への怒り、それに、諒に絡みつく血のカルマへの悲しみで、この地獄を作ったの。」

オレの為に？

「ええ。これからは、諒の罪は私の罪。仲間になったしね。」

互いのあたたかい鼓動が聞こえる。
このぬくもりをオレは知っている。

これは、母親のぬくもりだ。

「うっ、グス。」
「男が泣いてもキショいだけよ。」
「ああっ。ごめん。」

地獄は徐々に赤い花畑に塗り替わっていった。
オレを開放したユウメは遠くを見つめ、一本の木を見つける。
弾かれたように走り出し、彼岸花を掻き分けていく。
オレも慌てて追いかける。

訳もなく体が重くなっていく感触に戸惑うも、どうにか一本の木に辿り着く。

愛染の少女は花を見つけて笑っていた。

赤い、赤い椿の花を。

一房摘み取り、オレに渡してくれた。

「花は美しく咲いている時に取らないとね。」

そうだな。

「儚く消えるとわかってると、尚更よね。」

そう、だな。

ユウメは後ろを向いて、天を仰いだ。

「夢は夢であってほしいよね。」

二人並んで、夕日を眺め続けた。

「……みたいな夢を見てるよ。」

しとしとと降る小雨が格子を叩く。
山と積まれた帳簿が私の机の大半を占め、残り僅かな空間で作業に取りかかった。
自動筆記具で並列処理をしていなければ到底間に合わなかっただろう。

「なかなかえげつないの。」
「えっ、そうかな。
この屋敷の中で私が一番優しい部類に入るはずなんだけど。
あっ、そっちの緑の帳簿取って。」

帳簿に左手をかざすと、ひとりでに必要な情報が宙にうっすらと浮かび上がる。
さっと指を振ると、文字が手元の帳簿に吸い込まれていく。

「コピペは重宝するわ～。」
「ワシの常識が崩れそうじゃ。」
「常識は先入観よ、ゼクト。
今日の常識が明日の非常識になるなんてよくあるわ。」
「そういう意味じゃないのじゃが。」

さらさらと筆を進める。
やっと四半期決算が終わりそうだ。

「あの子の意識と私の意識、一時的にリンクしてるんだけど、だいぶ安定してきたわ。もう起きれるはずよ。」
「諒、と言ったか。その坊主は随分長引いたの。」
「でも峠は越えたわ。あのままほっておいたら脳に過負荷がかかりすぎて死んでいただろうから。」
「…魔眼かの。」
「ええ、彼の魔眼はかなり凶悪よ。彼の夢の中で、十七回存在を殺されたわ。」
「存在？」
「肉体だけでなく、『私』という存在自体を特殊な斬撃で消滅させたのよ。」

勿論、防御に用心を重ねていた私は、今まで自分が造った魔道具

全てに分霊を移すことで消滅を免れている。
屋敷全体が魔道具だし、帳簿一つ一つに至るまで魔道具だから、当分消滅は免れるだろう。

「それでも危険な者じゃ。坊主の『殺人衝動』を抑えねば災厄を撒き散らすであろうぞ。」
「応急処置は施したから大丈夫だと思う。要は魔眼の能力が遮蔽されていれば負荷がかからないはずだし。」
「うぬ。使う度に魔眼の力が強くなるのであればマズいの。」
「まあ、そこら辺はあの子が人間辞めたら解決するでしょ。」
「さらっと恐ろしい事を言うようになったの。」
「だって、『紅き翼』に会いたいって言うし…。」
「アラ、なんじゃと？」

うっかり口が滑ってしまった。ああ、忘れてもらわないと。
「よし、これで帳簿もまとまったし、あの子の部屋覗いてみるよ。」
「おっ、そうか。どれ、ワシも見てみようかの。」

隣の襖をそっと開け、中に入ると諒が穏やかに寝ていた。

「夢はどこまで制御していたのじゃ。」
「私は地獄しか夢にいれてないんだけど。後は放置してた。」
「それにしては穏やかじゃの。」
「そうね。途中から花畑に変わったからかしら。あんまり意識を向こうに割いてなかったからよくわかんない。」

枕元に近寄り、額をくっつける。
熱はないみたいだ。
体温、脈拍も通常で安定している。

「なんか慣れとるの。」
「これでも、いろんな人に仕事をしてきたからね。」

諒は私の首に腕を回し、そのまま私の顔を引き寄せ、

むにゅっと諒の口を手で抑えた。

「もう起きてるんでしょ。バレバレよ。」

ぱちくりと少年は目を開け、ニヤリと笑った。

「あ～、わかったか。で、ここどこ？」
「私の屋敷よ。服も揃えてるから好きに着替えて。」
「ありがとう。だけど、この服汚れないように出来てるんだ。」
「いつもその格好はマズいと思うな～。」
「そうか、わかった。それで、オレはお前に本当について行きたいんだ。どうしたらいい？」
「ひとまずここにしばらく住んで。私がいいって言うまで安静にし

てほしいの。」

諒は見かけ以上に衰弱していた。命に関わる程に。
つまり、それ程何も食べていなかったのだ。
他にも頭蓋の裏に刻印が施されていて、私は諒を運び込むとすぐに開頭して刻印を除去した。

「オレ、何日寝てたんだ？」
「そんなに経ってないよ。十時間くらい。」
「不思議だな。死の線と点が見えない。」
「特殊なコンタクトを諒に入れといたからね。」

それ以上何も言えず、床に倒れてしまう。
ゼクトが腰を支えてくれた。

「大丈夫か、ユウメ。もう休むのじゃ。酷く魔力を使っておる。」
「んっ…、やっぱり精霊魔法以外だとキツいわね。
治療に時間かけすぎたかも。」

結局無理をして人に迷惑をかけてしまう。
何百年生きてもこういう所が情けない。

「静かに眠るがよい。」
「ムニャ…、私、死なないから…。」

緊張から解放されて、私はすっかり寝てしまった。

ゼクトは眠り姫をそっと抱き上げ、諒の部屋を後にする。
去り際に、諒を素っ気なく見つける。

「お主をここまで回復させるのに、ユウメは様々な処置をしたのじゃ。感謝するがよい。」
「ああっ…。そういえば、あなたは誰でした？」
「ワシは、フィリウス・ゼクト。ゼクトでよい。」

彼は返事も聞かずに出て行った。
諒にとって初めて原作の登場人物に出会いであったが、あまり実感がわかず、途方にくれた諒であった。

諒の刻印を呪い返し、片手間で逆探知をしていたユウメは予想以上に魔力を消費し、寝込んでしまった。
ユウメの魔力保有量は、後に世界に名を轟かす近衛木乃香に匹敵するが、それを使い切る程凶悪な遅効性の呪いであった。
頭蓋の裏に呪いを刻める者は非常に限られてくる。
ユウメは犯人に目星をつけたが、今すぐ倒せる相手ではないのはわかっていたので、自分の体を休ませた。

微熱を出したような倦怠感が私を包む。
病気ではなく、魔力の枯渇と精神の過剰なストレスが原因だと思う。
諒がついさっき夕飯を持ってきて、申し訳なさそうに謝ってきたので気にするなと部屋から追い出したが、本当はそばに居て欲しかった。
この屋敷には、鬼、妖怪、神と私より年上だらけだ。
上の人には愚痴はそうそう訊けない。
部下に愚痴るのもかっこ悪い。
例え仲間であってもだ。
私は言い知れぬ不安を拭うために、自問自答をする。

私は本当に生きているのだろうか？

生きている。

自分の好奇心と興味、欲求を糧に生きている。

自分の力で何を為したいんだ？

人類の進化、ひいては人間の恒久的平和を導く。

その心は？

…広大無辺の宇宙との接触。
未知の遭遇への期待。

準備は？

魔法世界において安全な進化を模索、十分なデータを採取した後、
私が納得できる方法で魔法世界を破棄する。
破棄するまでに、表の火星に資材を準備し、可能ならば居住拠点を
建設する。
また、オーバーテクノロジーの武力を用意する。
破棄した後、まず戦争行為の全てに介入する。
世界が緩やかに全体主義を採れば、その中枢に潜り込み、例の魔道
具を強制的に聖地に配備する。

現段階は？

魔法世界の構築準備、資産貯蓄、人材の調達。

暗い天井は黙って私の独り言を聞いてくれた。
上手くいくかもしれないし、失敗するかもしれない。
さらに泥沼に陥るかもしれない。

まだまだ、捕らぬ狸の皮算用といった所だが、ここまで具体案になれば、今は上等だろう。
ユウメはそのまま寝返りをして、ほころんだ。
今日はぐっすり眠れそうだ、と安心した。
彼女はこの時代で最も規模が大きく危険な思考をしたかもしれない。

第十話　閑話その一　ユウメのしわ寄せ　後編（後書き）

前書きがあんなこと言ってますが、作者は元気です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1531s/

魔法先生ネギま！精霊転生

2011年5月21日15時39分発行